

INTERCULTURE

関西学院千里国際中等部・高等部 Senri International School of Kwansei Gakuin (SIS) | 関西学院大阪インターナショナルスクール Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS)
〒562-0032大阪府箕面市小野原西4-4-16 | 4-4-16 Onohara-nishi, Minoh-shi, Osaka-fu, 562-0032 JAPAN | TEL 072-727-5050 | FAX 072-727-5055 | URL <http://www.senri.ed.jp>

Sports Day

AISA Volley Ball, Tennis

Model United Nations

英検1級に1名合格

FALL 2012 No.135

I25 KWANSEI GAKUIN
1889-2014

Be World Citizens Creating a Bright Future.



2012/09/21 International Day of Peace

関西学院千里国際キャンパスは、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う関西学院千里国際中等部・高等部 Senri International School of Kwansei Gakuin (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする関西学院大阪インターナショナルスクール Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、国内外のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(IMS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。

世界で通用する学力へ

眞砂和典

SIS校長

私達SOISはインターナショナルスクールと帰国生を受け入れる中・高等学校の共生という画期的な方法を取って教育を行っている。一般的にインターナショナルスクールは地域から隔離された学校になりがちだが、OISはそうではない。SISもこの環境の中でいろいろな成果を出しているが、今回は学力面でのデータから論を進めていこう。

◇

2012年6月12日に実施された大阪府の学力・学習状況調査の結果が返ってきた。府内の中学3年生4万5千人余りが受けた学力テストの結果が表1だ。SISの平均点、大阪全体の平均点そしてその差を示している。科目の種別はAが基礎、Bは活用問題で英語は総合問題となっている。

この学力・学習状況調査についての詳細は大阪府のホームページ内にある。

結果について

<http://www.pref.osaka.jp/shochugakko/h24hugakuchou-kekka/index.html>
問題について

<http://www.pref.osaka.jp/shochugakko/h24hugakuchou-jisshi/index.html>
(リンクは直接入力することもできますが、学校のホームページに掲載されるこの記事からクリックすると楽です。)

表1 各科目の平均点とその差

科目	SIS平均	大阪平均	差
国語A	75.6	66.1	+9.5
国語B	70.7	48.5	+22.2
数学A	78.3	66.7	+11.6
数学B	56.6	42.0	+14.6
英語	93.0	50.2	+42.8

まず注目してもらいたいのは国語と数学だ。基礎よりも活用の方が本校と大阪全体の平均点の差が大きい(太字)。興味のある方は問題を解いてみてもらいたい。特にB問題は実体験に基づいた考える問題だ。解答がひとつとは限らないものもある。下手なパズルやテレビのクイズ番組よりもずっと面白いと思う。帰国生が多く、国語の漢字など基礎力はまだ大阪の平均よりも9.5点しか高くないが、活用では22.2点高くなっている。これは私達が目指している使える学力、言い換えれば「生きる力」をつけている証拠になると考えられる。英語に関して本校の平均が大阪全体よりも42.8点高いという結果は素晴らしいことだと思う。また、SISには得点70未満の生徒が一人もいないというには大変驚いた。あれだけ厳しい英語の授業に全員がしっかりついて来ているということになるからだ。しかし、もっと細かく本校の英語のレベル別に見ると更に重大なことに気付かされる。

表2 英語のレベル別平均点

レベル	h+	h	i	s
人数	11名	10名	12名	35名
平均	97.6	95.7	94.7	90.2

SISの英語は4から5つのレベルに分けて授業をしている。h+はネイティブレベル(この生徒達はOISと英語の授業を共有している)、hは英語による教育を4年以上受けていた帰国生が多くを占めている。iレベルは数年間英語圏で学んだ者が多く、sは一般の日本の小学校や日本人学校からの帰国生徒が中心となって

いる。

確かにレベルと平均点に相関関係はあるが、それぞれのレベルの生徒をよく知っている教員にとっては不思議な結果だ。ネイティブと一般の生徒の差が7点程しかないからだ。もし点数に上限がなければ、h+は300点とか、hは230点とか取れるだけの英語力があるはずだ。つまり、このテストは英語が使える生徒にとっては力を十分に発揮できる場となっていない。

このことは2月のインターカルチャ133号でもTOEFL-iBTの結果と比べてお知らせしたが、日本で行われている定期試験や実力試験、さらに言うならば入学試験でさえ英語力、英語での思考力を本当に測ることができているのだろうか?と心配になる。例えば、英語に強い人、普段から英語に触れている人、留学しようと考えて努力している人たちは正当に評価されているのだろうか? 同じことは他の教科でも考えられる。目標が日本の入学試験になってしまった場合に、それは「世界のどこでも生き抜く学力を身につけた」といえるのだろうか? 目標の設定や評価が正しくなければグローバルな人材を育てることは難しい。

今、日本国内では生徒、学生の学力低下が指摘されている。偏差値による相対的な競争では周りよりも上になれば「勝者」になったつもりでいられる。しかし、子供の数が減っている状況は安易な「勝者」を生み出す。だから絶対的な学力が落ちているということに内側からでは気が付かない。上に書いた学力調査の結果が相対的に良くてもそこに甘んじてはいけけないのだ。日本の教育を立て直すために、地球規模の視点に変えることは単なる国際化というよりもっと本質的な必然性がある。

◇

中央教育審議会高等学校教育部会が始まって1年が過ぎた。9月の会議ではこれまでの「まとめ」とも言えるような展開があったのでここにそのリンクを文科省のホームページからご紹介したい。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/1325670.htm

この中の配布資料1から4はあたかも私の誕生日にももらったプレゼントと感じられるような興味深い発表だった。この流れをどのように具体化するかという例として、私は高校の授業にゼミのような形を導入するという提案を試みた。これまで何度か言及してきた少人数制教育に対しては、教員が楽になるだけで効果が出ないと考えている委員もいたようだった。もちろん、少人数クラスで多人数の時と同じように「一方通行の」授業を進めていたのではもったいない。教員の本当の技量が試されるコミュニケーションを主体とした授業が、生徒と教員双方を磨くであろうという提案だ。

大学入試を変えないと高校教育の歪みが改まらないという議論から中教審に高大接続特別部会が立ち上がった。国際バカロレア(IB)についても議論や試行を重ねている。大きな変革の時期を迎えた日本の教育に対してSOISはこれからも主体的に関わり、貢献できると信じている。



IB in Japan

John Searle

OIS Head

In September OIS hosted the East Asia Association of IB Heads of School meeting. We were fortunate to have visitors from all over Japan, as well as from Korea and Taiwan. Mr Ian Chambers, the Regional Director of IB East Asia talked to us about the developments within the IB as the organization expands its operations around the world, and also the developments in the relationship between the IB and the Japanese government.

The Japanese government is moving ahead with plans to introduce the IB diploma programme as an alternative to the state curriculum in its schools. The growing view within Japan appears to be that to provide a suitably skilled workforce to compete in the global economy, schools and universities will need to develop graduates with a number of qualities and attributes: assertive, and cooperative individuals who are problem solvers, leaders, critical thinkers, linguists, who seek challenges, are appreciative of other cultures and have a well rounded education as well as a sense of Japanese identity. These criteria were developed last year by the Global Human Resource council, a subcommittee within the Ministry of Education. Since then, the Ministry has developed plans to have as many as 200 schools offer the programme. Many parents will have seen a series of articles in the Yomiuri Shimbun, which talk about Japan's future educational plans related to IB. One unclear element at this time is whether the government wants IB schools or 'IB-like' schools; a subtle distinction where schools' curriculum would reflect the outcomes of the IB programme but the cur-

riculum would be developed wholly by the Japanese government. This is a very interesting distinction, and reflects ongoing ambivalence that surrounds the future of Japanese education. To take on the IB diploma as an offering in 200 Japanese schools would be enormous undertaking. This is not only to do with the financial cost which is considerable, but as much to do with changing teacher training, the choice of texts and the method by which students are assessed and enter university. The adoption of the programme in Japanese schools will entail more than just an addition to a curriculum; it will need to be understood as a different approach to learning in the context of an education for global citizenship. 'Learning for global citizenship must include specific attention to philosophy, pedagogy, content and assessment.' It also requires the development of 'pluralistic attitudes'. To offer a Japanese version of the programme, which is not actually the IB might mean that some of these fundamental ideas may not be included.

This raises some very important issues. Parents who choose OIS because they want their children involved in an IB education are often committing to something that is quite different to what they experienced at school. It is important that families understand these differences. Similarly teachers, parents and students in Japanese schools that adopt the IB must be prepared to view teaching and learning in a different way. It is not a right or wrong situation, but more a view of what people hold as important in the experience of an education. This will be the greatest challenge. It is certainly an interesting time to be involved with the IB at an international school in Japan.



Two Schools Together
Senri International School (SIS)
Osaka International School (OIS)
KWANSEI GAKUIN

New Roof and Shaded Areas

The new school year promises to bring a lot of exciting new ventures. If you have visited the campus this trimester you will have seen that the renovation of the courtyard has been completed with the addition of the roof and shaded areas. The space is not only a social area for students; it will also be used for performances and study. The completion of the courtyard project also included an upgrade of the wireless network so that students and teachers will be able to take advantage of the flexibility this brings to the use of that space.



Two Schools Together



Theme "Animal"

Performance



Two Schools Together



Ultimate Frisbee Dodge Ball



今年のSports Day・午前の部は、強い日差しの中、それ以上に熱くなるトーナメントが開催されました。種目はおなじみ、ドッジボールとアルティメットです。どちらも激しいチーム戦が繰り広げられ、避けて、投げて、取って、どのチームも全力で相手を迎え撃ちました。優勝は、ドッジボール:11年生Bチーム、アルティメット:12年生チームでした。特にアルティメットでは、優勝・準優勝とともに12年生が勝ち取ました。そのため、決勝戦は同学年チーム同士で戦うというエキサイティングな展開になりました。12年生はやっぱり強いですね！また、3位・4位は11年生チームが埋めるという、こちらも面白い結果となりました。今年は11年・12年が上位を占めました。しかし来年、成長した9年・10年生がどのような活躍を見せ、今の11年生と戦ってくれるのかとても楽しみです！

(Student Reporter Y)

午後の部は、各学年によるパフォーマンスで始まりました。どの学年のパフォーマンスもクオリティが高く、日頃の練習の成果を出すことができていました。中には小道具を使っの演出もあり、とても見応えがありました。その後は、大縄、ムカデ競争、綱引き、障害物競争などが行われ、応援する側も、競技に参加する側も、精一杯頑張っていました。励まし合ったり、ハイタッチをして喜び合ったりと、とても楽しそうでした。特に最後に行われたリレーでは、全力で走る選手たちと、「頑張れ！」と喉を枯らして応援する皆の姿が印象的でした。今回のスポーツデーで、より仲間との絆を深められた生徒も多かったと思います。終始、とても盛り上がった1日でした。

(Student Reporter I)



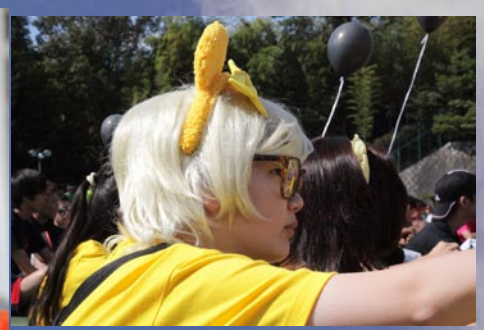
Sports Day

Theme "Animal"

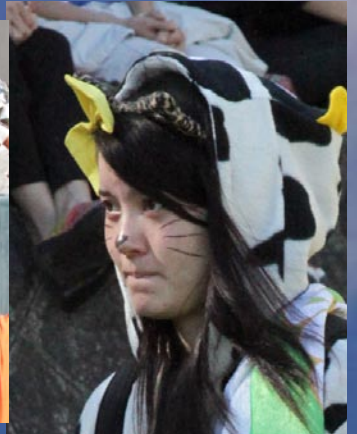
Obstacle Race
Jump Rope
Centipede Race
Tug of War



Two Schools Together



Faces



Relay

Sports Day

Theme "Animal"



Two Schools Together AISA Girls Volley Ball



倉橋眞子
SIS11年

こんにちは。今年度HS Girls Volley Ballチームのキャプテンを務めさせて頂いた11年2組の倉橋眞子です。今年度もAISAで優勝できたこと本当に嬉しく思います。みなさんの激励や労いの言葉本当にありがとうございます。また試合中の声援も重ね、私達はたくさんの人に支えられてバレーができていたことをシーズンが終えた今もしみじみと感じています。今回の優勝を受け皆さんの中にはこれまでの強いガールズバレー部のイメージをよりもっと強くされたことと思いますが、実は例年までの成績とは少し違い今年は悔しい思いをたくさんした年でした。しかしその悔しさをチーム全体で受け止め日々士気を高めあい努力したことが今回の結果に繋がっています。「努力」と「仲間」この言葉が今年度のバレー部の全てです。私自身チームの皆に支えられ、先生方に支えられ、周りの人に支えられ、そして自分の志に支えられてこのシーズンを過ごしました。私を支えてくれた皆さん、チームを応援してくれた皆さん、そしてチームにもう一度お礼を言いたいです。本当にありがとうございました。



Asako Otsuki
SIS12年

The Sabers Girls Volleyball Team has a long history of victory. With a strong desire to continue such a legacy, the team of 2012 worked diligently to end the season with a championship.

This season started off full of anxiety for us seniors. Many experienced players had graduated, leaving a few experienced varsity players and lots of new faces. However, in no time, all worries disappeared, and instead the gym was full of energetic, hard-working girls. Freshmen and sophomores surprised us on a daily basis with their rapid improvement, as we upperclass-

men frantically thrived to become the best role models we could be.

We came in 6th at our first tournament, clearly off to a rough start. The tears of frustration shed there became the seeds of motivation for the next few weeks leading to the final period of the season. Shortly, the overly energetic JV girls headed off to Yokohama where they played with great spirit, coming in 3rd place and setting the scene for the AISA tournament.

The Sabers ended the first day of AISA undefeated. The incredible support of the home crowd and the hardworking JV team were at the root of our success. Advancing to day two, we smoothly made it to the semi-finals where we fought against Yokohama International School, in a game that was “bad for Ms. Hirai’s heart”, which led up to the championship game we’d all been dreaming of. Once again, the cheers from our beloved JV girls, friends from Korea International School, and classmates that had taken the time to come support us on a Saturday afternoon, drove us on. The emotional 3-0 victory against Marist ended in tears as immeasurable joy over the victory and undeniable sadness that the season was over combined and resulted in a whole lot of messy faces.

I could not be more proud to have been given the opportunity to be captain of this amazing team of 42 heartfelt girls. I know this team will forever hold a special place in my heart.



Two Schools Together AISA Boys Volley Ball



萱嶋 智
SIS12年

僕たちHS男子バレーボールは10月18日から21日まで韓国に行ってきた。AISAトーナメントがKorea International Schoolにて行われるからだ。韓国では4日間ホームステイで過ごした。AISAには韓国からKorea International School, Seoul International School, Korea Kent Foreign School, Asia Pacific International Schoolの4校とミャンマーからInternational School of Myanmar、そして僕たち Senri Osaka International School の6校が参加した。

19日からAISAは始まり、第1試合目はSISとだったが惜しくも負けてしまった。しかし2試合目のAPISとは勝つことができた。この日はホストの子やチームメイトなどと一緒にCoex Mallに行き、食事をした。次の日の1試合目はKKFSとで危なげなく勝つことができた。次の2試合目はホスト先であるKISとだった。この試合はとても白熱したものになった。そして激戦のすえなんとか勝つことが出来た。そしてKISに勝った流れのまま決勝戦になり一度負けて

しまったSISなのにもかかわらずストレートで勝つことができ、結果優勝した。たぶん学校のだれも男子バレーボールが優勝するとは思っていなかったと思う。なぜなら、AISAの前にあったWJAAでは6位、JVトーナメントでは4位だったし、近年男子バレーボールが優勝したことがなかったからだ。シーズンのはじめはいつも大事ところで勝ち切ることができずに負けていた。また精神面も弱く連続失点も多々あった。しかしバレーボールのシーズンを通して精神面が成長し、AISAトーナメントを勝つことができたのだと思う。

僕たちだけではAISAトーナメントを勝つことができなかった。いつも一緒に頑張ってきたチームメイト、そばで支えてくれたマネージャーや的確なアドバイスなどいつも僕らを見守ってくれていた間島先生、三ツ橋先生、時々練習に付き合ってくれた受験生、韓国で快くホストしてくれたホストファミリーの方々、そしていつも応援してくれたみなさんのおかげで優勝出来たのだと思う。本当にありがとうございました。

WJAA and AISA

SOIS belongs to two competitive activities leagues, one domestic and one international, each with season-ending championship tournaments.

The domestic league is called the Western Japan Activities Association (WJAA) and consists of several schools.

Our international league is called the Association of International Schools in Asia (AISA), which consists of four schools:

- Korea International School
- Senri and Osaka International Schools of Kwansei Gakuin
- Seoul International School
- Yokohama International School

Through AISA, SOIS students participate in many activities: basketball, volleyball, soccer, swimming, tennis, band, orchestra, choir, student council, and mathematics. Season-ending events are held each year at a league member school on a rotational basis.

Two Schools Together AISA Tennis



Shiho Takagi
Coach, Counselor

The girls and boys tennis teams travelled to Seoul, Korea this year for the AISA Tennis Tournament hosted by Seoul International School (SIS). Though we had a small group of just 6 players (4 girls and 2 boys) who travelled, the students showed great teamwork and fighting spirit, as well as great sportsmanship, proudly representing SOIS Sabers.

The boys team got to a tough start having only two players on the team and playing against some strong and experienced opponents from the other teams, especially SIS. Though they were put in difficult conditions, both Kazuki Kobayashi (Grade 10) and Kai Burman (Grade 12) performed very well, fighting for each point and not giving up. There were some close matches played and some great rallies were seen by both players. Kazuki, only in 10th grade, will have more opportunities to come and we look forward for two more years of great tennis to come in the future.

The girls tennis team had two singles players, Kana Yokoyama and Kyoka Kitagawa, and the doubles pair of Mirai Mizuno and Haruna Ogata, all who experienced the AISA tournament last year. This year, the girls were faced with greater competition, especially from SIS, which was not seen last year and it raised the whole level of the tournament. For the doubles pair, Mirai and Haruna (both in 10th grade) improved exponentially with each game they played, showing off some excellent net play and great teamwork. The pair went through to play the match for third place, playing against Yokohama International School. Mirai and Haruna fought with confidence and a positive attitude, bringing home a great win and third place!

Some amazing and competitive tennis was seen for the girls' singles tournament as well. Kyoka Kitagawa (Grade 11)

played with great fighting spirit as she was challenged by an extremely 'hard-to-play' opponent who hit every single ball back into her court. Kyoka did not let this get the best of her and she stuck out with determination till the end, winning that game. She was matched up with some tough opponents but she played her tennis throughout.

The final championship match came to be one of the highlights of the whole tournament. Kana Yokoyama (Grade 10), who was champion last year, won all her matches up to the finals, only conceding 1 or 2 games to her opponents on the way. Kana played the number one girls' singles player of SIS and it turned out to be a very close match between the two girls. Both players played at their best, showing off some amazing winners and shots. Even though there was a large crowd cheering for the home player, Kana did not let that get in her way and she ended up dominating the match, winning 8-3. As her second championship title, we are very proud of her accomplishments and the superb tennis performed during this tournament.

Although we were a small team compared to the other schools, the players all had a wonderful attitude, played excellent tennis, showed great teamwork and even made great friends from the other schools. We hope to see more students join the tennis team next year so we can go back stronger and with a full team, and win the team title next year!!



Two Schools Together

Triathlon! Aquathlon! Cross Country!



Hiroshi Baba, Tara Cheney

Triathlon/Running Coach

■7/29高知いごっそうアクアスロン

"Igosso Aquathlon" was held on Sunday, July 29th in Kochi-ken under the extremely hot weather. In total 15 people finished and 2 people became winners.

<Winners> Swim 1500m + Run 10km Male: 1st 前田隼矢 Syunya Maeda (KG, Coach), Female: 1st 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (SIS11)

<Other Finishers> Gr.7-9: Swim 200m + Run 4km 高須璃紗 Lisa Takasu (SIS8), 安岡加紗音 Kasane Yasuoka (SIS8), 水野ありさ Arisa Mizuno (OIS10), 水野みらい Mirai Mizuno (OIS10), 馬場優人 Yuto Baba (OIS7), 藤森史恩 Shion Fujimori (SIS7), Gr.10 and Up: Swim 1500m + Run 10km 五井春香 Haruka Goi (SIS11), 五井達也 Tatsuya Goi (SIS11), 細井 陸 Riku Hosoi (SIS11), 福田将人 Masato Fukuda (SIS11), 吉形優樹 Yuki Yoshigata (SIS11), 森岡瑛美 Emi Morioka (SIS Graduate), 馬場博史 Hiroshi Baba (Faculty)

■8/05アクアスロン京都

"Aquathlon Kyoto" was held on Sunday, August 5th at Kyoto Aquarena in Kyoto city. In total 7 people participated and two students placed.

<Placed> Gr.10 & Up: Swim 1000m + Run 6.4km Female: 1st Overall 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (SIS11), Gr.10-12: Swim 400m + Run 2.9km Boys: 3rd 細井陸 Riku Hosoi (SIS11)

<Other Finishers> Gr.7-9 Swim 300m + Run 2km: 岡崎季良々 Kirara Okazaki (SIS7), Gr.10-12 Swim 400m + Run 2.9km: 田中謙 Yuzuru Tanaka, Gr.10 and Up Swim 1000m + Run 6.4km: 福田将人 Masato Fukuda (SIS11), 前田優衣 Yui Maeda (SIS12), 馬場博史 Hiroshi Baba

■9/09吹田市市長杯トライアスロン・アクアスロン

"Suita City Mayor's Cup Triathlon/Aquathlon" was held on September 9th at Senri Kita Koen. Total 33 people of SOIS/KG participated and 7 people became winners. (S=Swim, B=Bike, R=Run)

<Winners> Aquathlon: S125+R1.4 Gr.1-2 Girls 富美奈津実 Natsumi Tomi (OIS1), S500+R2.8 Gr.7-9 Boys 馬場優人 Yuto

Baba (OIS7), Gr.10 & Up Female 岩澤直美 Naomi Iwazawa (SIS11), Triathlon: S500+B10+R2.8 Gr.7-9 Girls 水野ありさ Arisa Mizuno (OIS10), Boys 岩澤史文 Shimon Iwazawa (SIS8), S1000+B20+R5.6 Gr.10-&Up Female 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (SIS11), Male 前田隼矢 Syunya Maeda (KG), Age40&Up Female チェニー タラ Tara Cheney (Faculty)

<Other Finishers> Aquathlon: 川崎レナ Rena Kawasaki (OIS1), 藤戸優衣 Yui Fujito (SS2), 田水サム Sam Tamizu (OIS1), トンプソンキース Keith Thompson (OIS2), 田水ハリー Harry Tamizu (OIS2), 山西志門 Shimon Yamanishi (OIS2), 武田七海 Natsumi Takeda (SS6), ハイマー仁紀 Niki Heimer (OIS6), 谷口らら Lara Taniguchi (OIS10), 田中謙 Yuzuru Tanaka (SIS11), 田和良真 Kazuma Tawa (OB), Triathlon: 安岡加紗音 Kasane Yasuoka (SIS8), 高須璃紗 Lisa Takasu (SIS8), 水野みらい Mirai Mizuno (OIS10), 藤森史恩 Shion Fujimori (SIS7), 米永亘佑 Kosuke Yonenaga (SIS8), 北野裕也 Yuya Kitano (SIS9), 岩間義尚 Yoshihisa Iwama (SIS9), 五井春香 Haruka Goi (SIS11), 早川遼 Ryo Hayakawa (SIS10), 五井達也 Tatsuya Goi (SIS11), 吉形優樹 Yuki Yoshigata (SIS11), 福田将人 Masato Fukuda (SIS11), Age40&Up Male 藤戸努 Tsutomu Fujito (Parent), 馬場博史 Hiroshi Baba (Faculty)

■9/16潮芦屋アクアスロン

"Ashiya Aquathlon" was held at Ashiya-shi Sogo Koen on Sunday, September 16th. In total 14 students participated and 2 students placed.

<Placed> Swim 250m+Run 3km: Gr7-9 Girls 3rd 水野ありさ Arisa Mizuno (OIS10), Swim 1000m+Run 10km: U40 Female 1st 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (SIS11)

<Other Finishers> Swim 250m+Run 3km: 藤森史恩 Shion Fujimori (SIS7), 岡崎季良々 Kirara Okazaki (SIS7), 米永亘佑 Kosuke Yonenaga (SIS8), 高須璃紗 Lisa Takasu (SIS8), 安岡加紗音 Kasane Yasuoka (SIS8), 岩澤史文 Shimon Iwazawa (SIS8), 岩間義尚 Yoshihisa Iwama (SIS9), A Swim 500m+Run 5km: 宗政洋輝 Hiroki Munemasa (SIS11), B Swim 1000m+Run 10km: 福田将人 Masato Fukuda (SIS11), 吉形優樹 Yuki Yoshigata (SIS11), Relay: Swim 500m 田中謙 Yuzuru Tanaka (SIS11),

(次ページ★に続く)

Two Schools Together

Collaborative Field Trip

2つの学校合同で遠足

Richard Fitzpatrick

Science

With the new academic year having only just begun, grade 7 classes were straight into the thick of the action as they took part in a collaborative field trip between the science and art departments. The students boarded the buses and headed for the picturesque coastal area of Wakayama bay. After an initial briefing they were sent off, with the warning about the blue ringed octopus still ringing in their ears, to investigate the area's biodiversity and attempt to identify and classify any organisms they could find in the rock pools and down by the water's edge. After a brief lunch the focus changed and the area was observed for its artistic merit as the pupils attempted to capture the differences between background and foreground.



前川さち

理科

9月19日(水)にSOISの7年生は臨海実習に行ってきました。前



日までの台風が嘘かと思うほど、良い天気にも恵まれました。今年は和歌山の由良、YMCAの施設での実習。とても美しい入り江になっていて、バスからの景色に歓声が上がりました。職員の方も熱心に生物について教えてくださいました。しかし、見られるのは固着性の貝類やカニが多く、イソギンチャクや海藻、魚などはさっぱり見られません。台風に流されてしまったのでしょうか。それでも、7年生は目を皿のようにしてクラゲや小さな魚を見つけ大騒ぎ、本当に探すのが上手です。大量にヤドカリを捕獲している子もいました。渋滞に巻き込まれ、滞在時間こそ少なかったものの、全力で海辺の生き物たちと触れ合えた一日でした。

SISのG7の中にはOISの生徒とはじめて話す、という子達も多く最初は少し緊張しているようでしたが、生物を探すなかで自然と会話が生まれました。帰りに“OISの友達ができ！”嬉しそうに話している姿も見かけました。今後のSOISの共通行事としては近いものではSports Dayがあります、これからもお互いのことをどんどん知って大いに盛り上がって欲しいです。

(★前ページの続き)

Run5km 三宅悠生 Yuki Miyake (SIS11)

■岩国クロスカンツリー

"JAPAN DoDDs Cross Country" was held on September 22nd in Iwakuni-city. In total 13 students participated in 5km XC and 2 students placed. DoDD schools: M.C.Perry, N.C.Kinnick, E.J.King, Edgren, Yokota, Zama

<Placed> Girls: 2nd 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (SIS11),

Boys: 10th 福田将人 Masato Fukuda (SIS11)

<Other finishers> 水野ありさ Arisa Mizuno (OIS10), 岩澤史文 Shimon Iwazawa (SIS8), 北野裕也 Yuya Kitano (SIS9), 岩間義尚 Yoshihisa Iwama (SIS9), 早川遼 Ryo Hayakawa (SIS10), 細井陸 Riku Hosoi (SIS11), 田中謙 Yuzuru Tanaka (SIS11), 荒木徳崇 Noritaka Araki (SIS11), 三宅悠生 Yuki Miyake (SIS11), 宗政洋輝 Hiroki Munemasa (SIS11), 吉形優樹 Yuki Yoshigata (SIS11)

Two Schools Together

United Nations International Day of Peace



Mark Avery

MUN Coordinator

One of the United Nations' primary roles is to raise awareness about global issues. The effect of the power of raising awareness is no more evident than it was in the hunt for Joseph Kony after his name and the atrocities he was responsible for swept the internet in March 2012. One way the UN raises awareness is by dedicating certain days of the year to a particular global issue. In all, there are 114 United Nations International Days every year beginning on January 27 with "International Day of Commemoration in Memory of Victims of the Holocaust" and ending with "International Human Solidarity Day" on December 20. September 21st is the United Nations International Day of Peace. It received its own official day only ten years ago to celebrate its goal of a global ceasefire for one single day. Mami Takahara and Mari Hatanaka from SIS, and Liam Kirwan and Emma Nakagawa-Hoffmann from OIS gave a ten minute broadcast. Students in grade 9 and up were asked to turn their televisions on to hear this message.

There has never been a day, in the history of humankind, when people haven't killed each other. And today, there are conflicts going on in every corner of our world. In Iraq, Afghanistan, the Democratic Republic of Congo, in Somalia and in Syria. Even the government of the country we live in is in dispute with neighbouring countries over ownership of two groups of small islands.

人間の歴史の中で、人々が殺し合いをしなかった時は今までに1日ありません。そして今日も世界中のどこかで争いが起きます。イラク、アフガニスタン、コンゴ共和国、ソマリア、シリア。私達が住んでいる国の政府でさえ、近隣(きんりん)の国と二つの島の所有権を争っています。

There is so much wrong with the fact that humankind can sustain war 24 hours a day, seven days a week and yet one day of peace continues to evade us – bad for us but worse for people who are surrounded by fighting and live in fear every single

day. The BBC reports that every minute, two people are killed in conflict. Imagine if we could achieve a global ceasefire for just one single day every year. At the end of 364 days of war, what would one day of peace do?

一日24時間、週7日、戦争をすることができるのに一日の平和を達成できないのは間違っています。戦争に囲まれた人が毎日恐怖の中で生きています。BBCによると一分ごとに二人が戦争のせいで死んでいます。年に一日だけの停戦を想像できますか？364日の戦争の後、一日だけの平和で何ができるのだろうか

It would not only save the 2,880 lives that would be lost in conflict, it would also save the lives of all the people who could receive medical attention and food and clean water in areas that are normally too dangerous to enter. It would save all the children who wouldn't be kidnapped and trafficked. It would save the lives of child soldiers. We're lucky. We can come to school without the fear of being kidnapped or being bombed or being shot. Wouldn't it be great if kids who aren't as lucky as us could have that for a day too? One day of peace would save lives and that should be the only reason we need to make it happen. And who knows, one day may turn into two days.

1日に2880人の命が失われないだけでなく、普段危険性があると見なされていて、入ることができない場所にまで医療、食料や水を提供することができます。この24時間で誘拐、人身売買、少年兵に使われている子ども達を救えることもできます。私達は幸せ者です。拉致や襲撃される恐れもなく学校へ通えます。そんな子ども達に私達と同じ幸せを1日でも多く味わってもらえることができるのならそれはすばらしいことです。この平和な1日は罪のない人達の命を守るために作られた日です。そしてその1日が2日にでも変わることを待っています。

Today, Friday September the 21st, is the United Nations International Day of Peace, established for the sole purpose of achieving a global ceasefire for one day. On September the 11th, 2001, the day when Kofi Annan, was going to announce a global ceasefire day, Al Qaeda hijacked four planes in the United States. The announcement of a day of peace was made later in the papers. However, there was no space for it on the front page. We have named the day. But that's not enough. Our leaders have to negotiate the peace. And what about us?

Let's start here, today, by making peace with someone we have a conflict with. If you can resolve a conflict with just one person – a friend, a classmate, a teammate or a member of your own family – from that moment there would be one less conflict in the world.

Let's make peace with those around us to show our support for a day when humankind stops fighting and sees what it's like to take care of each other.

今日、9月21日は『国際平和デー』です。この日は、1日争いをなくそう、停戦しようという目的で設立されました。2001年9月11日、アナン事務局長が初めて『国際平和デー』を公に公表し

(次ページ★に続く)

Two Schools Together

Die Studienreise nach Deutschland

福島浩介

国語科

7月8日から20日の13日間、OIS高校生1人、SIS高校生12人、ドイツ語の桂木忍先生と福島の教員2名の合計15人でドイツはミュンヘンへの研修旅行へ参りました。今回は到着早々、私も含めて、桂木先生以外の14名はホームステイというチャレンジングな日程でした。私は3年前から続いているこの交流プログラムをドイツ側でお世話いただいている日本語の先生、Röble先生のお宅にお世話になりました。彼女は子どもの頃10年間、東京に住んでいて高校までの教育を横浜の独逸学校で受けたそうです。こちらの日本語のクラスは、一つの学校だけでは人数が足りないため、四つの学校の生徒が集まって行われています。生徒達は、これらの学校の生徒の家庭にホームステイさせて貰い、いろいろな経験をすることが出来たようです。詳しいことは後に載せる、生徒達の文章をお読み下さい。

私達は、一昨年もお世話になったGrafin Gymnasiumと新たにBad Tölz Gymnasiumという学校を訪問し、先生方とお話をさせて貰ったり授業を見学したりしました。そこでドイツの人達が福島原発事故に大変な関心を寄せていることに驚きました。「Ich heiße Fukushima und abgestufte Hiroshima University, aber ich bin nicht radioaktiv.」ってことですぐに皆さんに名前を覚えてもらいましたし…。

授業の見学に関しては2日間で5時間ほど拝見したのですが、そのうち3時間は気がついたら自分が授業をさせて貰っていました。ギムナジウムの生徒達は五年生からいるのですが、8年生くらいになると皆流暢に英語を話します。そういうわけで、8年生と11年生の英語の授業では日本についての質問を受けて答えるという授業をしました。回転寿司、アニメなどに興味を持つ生徒も多くて、なかなかよい話ができました。たまたま翌週にJapanfest in München(ミュンヘン日本祭)という日本関連のお祭りがEnglischer Garten(英国庭園)という場所であったのですが、武道やお茶・お花などの伝統的なものに加えて、大勢のドイツ人コスプレイヤー達が集まっていて、なるほどと思いました(笑)。

また、10年生のラテン語の授業では東アジアには漢文というのがあってヨーロッパのラテン語と同じような働きをしたんだよというような話をしました。片仮名、平仮名、漢字の三種類の文字があるというのも新鮮だったようで、たくさんの生徒の名前を平仮名と片仮名で書いてあげました。より多くの生徒諸君に日本に対す



る興味を持って貰えたかなと思います。音楽と別の英語の授業を見学しましたが、音楽ではウエストサイドストーリーからアメリカを六年生と一緒に歌いました。6/8で二拍子と三拍子が交互に出てくるので難しいのですが、以前演奏したことのある私は上手く歌えて、生徒達の尊敬を集めることが出来ました(笑)。英語の授業では、新しく出てきた単語の意味を生徒がドイツ語で言おうとした際、先生が「英語で」と仰るのに軽く驚きましたが、こういう厳しい授業を経て使える英語を身につけるのかなあと感じました。

後半はユースホステルに移り、ミュンヘンでダッハウの強制収容所博物館や美術館、博物館、また一日かけて電車で隣のオーストリアはザルツブルグへ遠足したりしました。市内での自由行動時間は、門限だけ決めて自分たちで地下鉄に乗って帰ってくるようにしたのですが、道に迷ったり、電車を乗り間違えたりした際に街の人々の親切に助けられた生徒も結構いて、「一期一会ってこういうことを言うんですね」などと言う者もあり、なかなか意義深い旅行になったようです。最終日前日には、ユースホステルへホストファミリーの方々を招き、簡単なお別れパーティーを開きました。これは全て生徒たちが準備した会で、とてもよい会となりました。写真はその際のもので、私が撮影したので、自分が映っていないと残念です(笑)。

リサイクルや原子力発電のことにに関して、やはりずいぶん進んでいるドイツという国、そしてドイツの方々を実際にすることができるこの研修旅行はとても意義のあることだと思います。また、公共の交通機関を使い、ユースホステルに泊まるという、より現地に密着した旅は、おそらくほかの多くの学校では学校側として「不安で」なかなか実施できないのではないのでしょうか？ ここにもSOIS

(★前ページの続き)

ようしました。しかし同じ日に、アルカイダによって4機の飛行機がアメリカでハイジャックをされたため、この件は後日小さく新聞に載っただけでした。そのため、世間に広く知れ渡る機会を失いました。『国際平和デー』という名前はつけましたが、それだけでは足りません。国のリーダー同士で平和を築いていかなくてはならないのです。では、私たちはどうすれば良いのでしょうか。クラスメートやチームメイト、兄弟、親など誰とでもかまいません。今日1日、けんかをしている相手と仲良くしてみてください。周りとの平和を築くことによって、その瞬間、世界から1つ争いが消えるので

す。

身近な人と平和を築き、相手と思い合う大切さを『国際平和デー』を通して少しずつ広めていきましょう。

ありがとうございました。

For more information about the day, please go to these web pages.

United Nations official page

<http://www.un.org/en/events/peaceday/>

Peace One Day organization

<http://peaceoneday.org>

「らしさ」というものの一端を感じました。

この旅行に際して、私も久しぶりにドイツ語を頑張ってみました。が、まだまだ足りず、現地の方との会話を八割は英語ですましてしまいました。次回の引率の機会に向けて捲土重来を期しているところです。高等部では、毎年春学期から新たに第二外国語を学び始めることができますので、二年に一度ですがこの旅行に参加するために、またミュンヘンからやってくる生徒たちを受け入れるために、大きなことを言うと、ドイツから今まさに必要とされる、リサイクルや原子力発電に関することなどを学ぶためにドイツ語の学習を開始する生徒がもっと増えるとういと思います。

今後この交流を継続・発展させていきたいと思っています。三年前、去年同様、来年度はまたミュンヘンの高校生グループにSOISを訪問して貰えるように計画していますが、この交流に多くの人が参加してくれることを期待しています。

さて、以下に、実際に参加してくれた諸君の一部からの文章を掲載します。紙面の都合もあり、作文を依頼した際に字数を制限してしまったので、語り尽くせなかった部分も多々あると思いますが、彼らの「感触」を感じていただけたら幸いです。

宮本麟太郎(SIS10年)

今回のドイツ研修旅行ではじめてヨーロッパに行きました。2週間、滞在をしていて2つビックリしたことがありました。1つ目はヨーロッパの建造物です。地域ごとに特色があり、ドイツでは屋根のレンガ赤色に統一されていて、壁は白か淡い暖色に塗られていました。また、オーストリアのザルツブルクでは全体的に建物が白か灰色で塗られていました。2つとも大きな都市であるのに、このように昔ながらの伝統的な建物を何回も修復して長く使用したり、その地域に合う建造物を建てることによってその町の伝統を守り続けていることにとても感動しました。2つ目はドイツ人の食生活でした。基本的に毎日3食パンにサラミやハム、チーズなどを載せるだけというとてもシンプルな食事でした。日常的に多くの肉を食べたり、ビールを飲んだりしているのに、他の先進国などに比べてドイツの人達はとても健康的に見えたので、なぜなのかホストファミリーに聞いてみると、「新鮮なものをばかり食べているからだよ。」と言っていました。また機会があれば、絶対に行きたいと思いました。

戸倉 悠(SIS10年)

今回のドイツ研修旅行では、最初の一週間がホームステイで、後の一週間がユースホステルに泊まるというものでした。ホームステイでは、向こうの家族の人がすごく明るく迎え入れてくれました。英語とフランス語の授業以外はドイツ語だったので、授業内容はあまり分かりませんでしたが、同じクラスの子とはすごく仲良くなれました。学校が終わる時間は結構早めだったので、放課後に街や動物園など、たくさんの場所へ連れて行ってもらいました。今回ホームステイは1週間だったのですが、とても充実した1週間だったと思うし、バディともすぐ仲良くなれたので、良かったです。また、12年で行けたら行きたいと思うし、その時には授業の内容が少し分かるくらいドイツ語をしっかりと勉強しておきたいとおもいました。

Emma Nakagawa Hoffmann (OIS Grade 11)

"Fesche Buam" That's what you would call a good looking boy wearing Bavarian traditional leather breeches called " Lederhosen"

This summer I participated in a cultural exchange program with our sister school "Gymnasium Grafing" in Munich, Germany. There, I learnt colloquial German slang. Some people

could find that learning un-useful teenage jargon during a culture exchange program would be unnecessary. But I found that this helped me create a better relationship with the students at our sister school. Language is the main way of communicating not just for the teenage population but for humans in general. So while people may think that learning German slang would be gratuitous, I believe it helped me learn about the people and the culture of Germany in a more personal and relevant way. In addition, I also had the chance to share my own diverse culture and heritage to my German counterparts. I also took part in many fun activities while I was in Germany. I went to a Folks Fest, did sight seeing, went shopping at Marienplatz in the city centre of Munich, visited Dachau, as well as many museums and even took a day trip to Austria. I had the greatest experience this summer and I would love to go back to Germany when I have the chance.

松浦みづき(SIS12年)

私のホームステイ先はBad Tölzというミュンヘンから少し離れた小さくてかわいい町のはずれにあるファームだった。私を合わせて8人の大家族で、バディのバーバラも家族のみんなもとても優しく、着いていきなりホームステイという環境の中だったにもかかわらず、驚くほどすぐに打ち解けることができた。平日の朝はバーバラと一緒に学校に行き、最低でも13時には終わるので、学校がある日でも家族のみんなが毎日いろいろな場所に連れて行ってくれた。ナイトドライブ、ロックバー、ビアガーデン、ビアフェスティバル、レールスライド、ハイキング、プール、ファームミュージアム、ミュージカル、その他にも家で飼っている牛やウサギと触れ合うなど、日本では体験できないようなことをたくさん体験させてくれた。ミュージカルを観に行ったときは、隣町のバーバラの叔父と叔母の家でご飯を呼ばれ、その後もBad Tölzとはまた違ったかわいさがある町でアイスを食べたり、散歩したりしてとても楽しいひとときをすごした。ご飯も毎日家でホストマザーが作ってくれて、ソーセージやシュニツェルなど本場のドイツ料理がとてもおいしかった。この間誰かに、帰国後、「このキャンプをほかの生徒たちに勧める?」と聞かれたとき、「もちろん」と即答したが、本当にそれは本心で私ももう一度と言わず何百回でも行きたいくらいだと帰国してから改めて思った。

2014年関西学院創立125周年



Entrance



Coutyard

Two Schools Together

New Teachers

Mr Richard James Fitzpatrick (science)

Hello, SOIS. My name is Richard Fitzpatrick. I am very happy to have joined the faculty and I'm looking forward to sharing my enthusiasm for science. Originally I am from England, born and bred in Leeds. I studied Chemistry at The University of Liverpool, then spent several years working in the pharmaceutical industry. After this I chose to gain a PGCE and then began teaching science and chemistry at schools in and around Sheffield. This is my first position teaching in an international school and I am delighted to have arrived at such a vibrant and interesting place as this. I enjoy lots of sports, mainly mountain biking, climbing, trekking and football, and I am looking forward to using these to help me travel around and see as much of Japan as possible.

Ms Angela Juanice McCray (math)

Hello, OIS community! I'm excited to be joining the faculty and having the opportunity to learn more about Japan. I have come to Japan with my husband and we are both looking forward to our explorations. My duties here will include teaching MYP Mathematics in the middle school, IBDP Math Studies in the high school, and coaching girls basketball. I've been teaching since 1995 and have lived and taught in Michigan, Georgia and California in the U.S.A., along with London, England, and most recently Escazu, Costa Rica. My favorite past times are travelling, movies, and chocolate! We will have a great year together!

Ms Cary Mecklem (ESL)

Hello! Last year you saw me on campus subbing in various classes and this year I look forward to assisting students with their development of the English language in an academic context. Our previous teaching assignments were in the Philippines, Kuwait, Bolivia, New York City and Korea. I love spending time with my family -Kurt (M/HS Principal), Owen (Grade 3) and Frieda (Grade 1) as well as traveling, eating wonderful food, reading and watching movies. It's great being back in Japan after our summer vacation back home in Oregon. I look forward to an exciting year ahead!

Ms Maho Nakahashi (JSL)

Hello, everyone. My name is Maho Nakahashi, and I just want to say that I am very excited to be a member of OIS! I'm looking forward to meeting everyone during my time here. Here's a little bit of info about myself: I enjoy traveling. I also love cooking all types of food and my favorite sport is tennis. Thank you.

Ms Nora Patterson (music)

Hi. My name is Miss Nora Patterson and I am happy to be joining the team OIS and SIS as the music teacher for grades K-12. I am from Delaware in the United States and have taught music in both Maryland and New Jersey. Prior to moving to Osaka, I was living in Singapore for three years and spent some of that time working at an international high school both as a teacher and piano accompanist. I am excited to be in a new country and look forward to working with the elementary, middle and high school choir!

Mr Michael Richard Routh (PE)

Hello, SOIS! I grew up on the beaches of the north coast of Australia. After graduating from the University of Canberra, I taught for 3 years in Australia before finding the wonderful world of international education. I have thoroughly enjoyed my posts in Singapore and Egypt and am very excited about living and working in Japan. I would like to thank the SOIS community for making me feel so welcome and I look forward to an energetic, interesting and enjoyable year.

Ms Fukue Yamakubo (JSL)

Hi, my name is Fukue Yamakubo, a part time Japanese teacher. I teach grades 1~4, and 8~10. Before I came to OIS, I was teaching students who wanted to enter Japanese universities. I used to live in Victoria, Canada, and Taiwan for study and work. I love eating delicious food. I welcome your 'yummy information' anytime! I am excited to be a member of OIS!



Two Schools Together "START" has started

青山比呂乃

図書館

●図書館を図書館らしく！ STARTがSTART

この数年、SOIS生徒数が増えた中、アンスケや昼休み、放課後の図書館での騒音が大きくなり、ゲームや飲食までする人が出て、たびたび問題になっていました。つまり図書館は本来、読書や勉強に集中できる場であるはずが、残念なことに、飲食・ゲームなどをやる人の方が場所を取りうるさいので、読書や勉強をしたい人が図書館外に別な場所を探す、という本末転倒した状況が生まれてしまったのです。

図書館では、4月にシン智恵子先生が英語の司書教諭として赴任したのを機に、新たな取り組みを検討してきましたが、この秋から次のような新しい試みを始めています。その結果、以前に比べるとだいぶ静かに勉強や読書をする人が多くなっているように思いますが、どうですか？

9月からは、SIS高等部の生徒全員がipadを持つようになったため、そのことも視野に入れて、図書館を使う時のマナーや、図書館本来のあり方をみんなで再確認しましょう。

1つは、図書館では飲食・おしゃべり・ゲームをしない、というマナーを徹底すること。授業で図書館を使う時も気をつけるのはもちろん、個人的に利用する際にも、食べ物飲み物は持ち込まない、飲食物やゲームを持ち歩く必要のある時はカバンにしまっておくことになっています。この件で、図書館スタッフから注意を受けると、イエロー・カード1回、3回たまるとレッド・カードで、5日間図書館入館禁止、ということになっていますので、くれぐれも図書館にいられないくならないように、本来の使い方へのリスペクトを保ってください。

また、10月からは、図書館が開館する朝の8時から、START - Students & Teachers All Read Together という朝の読書タイムをSTARTさせています。これは中学生高校生と先生方を始めとした大人が対象で、自分のものでも図書館のものでもよいので、何か活字(本か新聞)を皆で読もう、という時間です。朝8時に図書館に来るのはよいが、ついおしゃべりをしている人もいたので、図書館で「しゃべるのではなく、本を読もう」という集まりです。これは、月火水金の週4日、朝8時から8時15分までをコアの時間としています。たくさん出席したら、何か達成した、という励みになるものを作ろうと、現在検討中。何か良いアイデアの提案、歓迎します！

●箕面世界子どもの本アカデミー賞のこと

皆さん、箕面市内の小中学生全員が選ぶ、今年一番面白かった本に与えられる賞があるのを知っていますか？ハリウッド映画のアカデミー賞になぞらえた名前のついたこの賞は、しばらく前から、箕面市内の小中学校の生徒が全員参加して行われてきました。そして今年度は、箕面市立中央図書館が中心になって行われることになり、箕面市内の私立小中学校(箕面自由学園、聖母被昇天学院、関西学院千里国際・OIS)にも参加要請がありました。

ただし今年度は途中から加わったので、各学校で生徒が良く借りる本などの候補作を選び出す作業にも遅れを取りました。また公立学校のスクールカレンダーに合わせた実施スケジュールだったため、実際に候補作の本が箕面市の図書館からたくさん図書館に届いて、皆さんに手に取ってもらえたのは、夏休み直前の10日間くらいになってしまい、あまり良くお知らせできずに終わってしまいました。



Students & Teachers All Read Together

★When...?
Monday~Friday
(Except for Thursday)
8:00am~8:15am

★Who...?
MS/HS students, teachers and staff

★How...?
Bring / Borrow the book in any languages and read in the library together!!

Students & Teachers All Read Together

★いつ?
月曜日~金曜日(木曜はなし)
あさ8:00~8:15

★だれが参加できるの?
MS/HSの生徒と先生、スタッフ

★どうやって?
自分がよみたい本(何冊でもOK!)をもってきて/かりて
図書館でいっしょに読みましょう!

9月にSIS/OISの小中学生全員が投票できる事になっていたのですが、それも夏休み明け1週間ほどの9月7日が締め切りで、結局候補作を読めた人はわずかだったため、希望者のみの投票とした結果、SOISで投票したのはOIS中学生の一部だけ、という参加になってしまったのは、残念でした。

それでも、市内の学校での投票の結果、下記のように受賞作が決まり、受賞作家・挿絵・記者への通知がされています。11月11日(日)午後2時には、メイプルホールで授賞式が行われます。受賞作家のおひとりの講演会が予定されていますので、お楽しみに！

また、授賞式後年度末までの間に、受賞作家の方々が、市内の各学校を訪問してお話をする、という企画もあります。今年度は、実際の投票にあまり参加できていないので、訪問もお呼びできるかどうかですが、詳しいことがわかり次第、皆さんにお伝えしますね。今回の受賞作やその他の候補作の本は、まだ図書館内に展示していますので、いまからでも是非読んでみてください。

来年は、もう少し多く皆が参加できるようにできればと考えています。

2012年度受賞作

絵本賞:「のっぺらぼう」杉山亮作 軽部武宏絵 ポプラ社
作品賞:「れいぞうこのなつやすみ」村上しいこ作 長谷川義史 絵 PHP研究所

主演男優賞(男の主人公):ホームズ:「名探偵ホームズ まだらのひも」コナン・ドイル作 日暮まさみち訳 青山浩行絵 講談社

主演女優賞(女の主人公):ナツカ:「メリーさんの電話」ナツカのおおげ事件簿 斎藤洋作 かたおかまなみ絵 あかね書房
YA(ヤングアダルト)賞:「流星の絆」東野圭吾著 講談社

なお、OISでは、11月下旬に、OIS保護者会をスポンサーに、英語でのAuthor visitを企画中です。

SIS SIS高等部iPad導入スタート!

井藤眞由美
SIS教頭, ETT

この秋よりキャンパス全体でテクノロジー環境に大きな変化がありました。One-to-one computing(一人一台インターネットにアクセスできるデバイスを持つ学習環境)を進め、OISでは、高校生が自分のパソコンを持参することを奨励していますし6・7年生が一人一台のiPadを使っています。そして、今学期よりSISでも高校生が学校貸与のiPadを提げて学校に来る、という環境がついに始まりました。

使い始めて1~2週間のころにsoismail開通の連絡と共に、生徒たちの感想を届けてもらいました。このような楽しいメッセージも届きましたが…、

・iPadとても便利です!!!! I use an application to write down my homework and it has been keeping me very organized! Thank you for the iPad!

・受験勉強でも予想以上にこのiPadにお世話になっています。

・これまでパソコンでしてたことをiPadでできるので僕としてはかなり助かっています。iPadを使った英語授業もわかりやすくて先生とのコンタクトや課題の提出もこれまでより簡単になって大満足です。さらにNew York Timesなども読めるので通学時間に英語の勉強としても使っています!

・iPadなんて遊びにばかり使ってしまうそうだな・・・と思っていたのですが実際、夏休みには勉強面で何度も何度も利用でき、大変助かりました。

・私はiPadでRosettaStoneのアプリを使ってスペイン語の勉強を頑張っています。アンスケの時間にどこでもできるので、重宝しています。

中には、重くて大変なのでもっと授業で役立つようになることを期待している、という声もありました。SIS.ETT(メンバーは、田中憲三先生・合志先生・井藤)では、導入したiPadをより広く活用するために、校内研修を実施したり学外研修に参加したりすることと並行し、iPadを授業に取り入れている教員の使用例をビデオ撮影して教員間での情報共有も進めています。iPad導入一学期目の活用例を、一部ここでも紹介させていただきます。

教科独特の活用例

- ・「グラフ電卓」としての使用。(数学)
- ・気象庁の天気図を読み解く。顕微鏡の画面を写真撮影。(理科)
- ・Google Earthでの地理確認。歴史的美術品の鑑賞・観察。(社会)
- ・Kindleを使って洋書を読む。(英語)
- ・スポーツのフォームを動画で撮影して自己分析(体育)
- ・仕掛け絵本・アニメーションなど作成 (情報)

教科に共通する活用例

- ・リサーチ、写真・動画撮影、記録・メモ [まずこれらはどんな場面でも役立ちます]
- ・Moodleやsoismailを使つての教材配信、宿題の提出 [紙の削減・配布の確実性・カラー/ズームなどビジュアル効果として役立ちます]
- ・生徒の手書きの作業や教員の資料をボードに投影 [時間の有効活用となります。紙と鉛筆の作業も尊重します。]
- ・eBookとしての使用 [iPadが重い分、これによって持ち運ぶ教



豚の腎臓解剖の様子をiPadで記録(生物)

科書は減っているはずです。]

授業以外では、授業選択やLHRの活動に使用されています。11年生の学年旅行準備にも大活躍しているようですね。生徒会の会議でも活用してもらっていますし、運動会のパフォーマンス準備にも役だったという話も聞いています。

One-to-one computing・・・教員と生徒が一人一台のインターネットデバイスを持つ環境が実現してまだ実験段階の一学期目ではありますが、このタブレット導入には大きな効果があったことを実感しています。現段階ではまだ「印象」でしかないと言ったことになりませんが、近い将来、アンケート等によってより体系的に検証したいと考えています。もちろん言うまでもなく、便利とはいえあくまでもこれは補助ツール。授業のメインのカリキュラムや教員の教科指導、授業の進行をサポートするための道具であり、決してiPadを使うことが授業の主目的になってはいけません(「情報」の授業だけは若干例外ですが)。また、準備のために教員の手間や負担が増えすぎるようでは本末転倒です。また、テクノロジーを賢く使うことは大事ですが依存してはいけませんし、「目新しいことをしていることが素晴らしい」という勘違いをしてはいけません。このようなことを心に留めつつ、さらなる有効な活用方法を考えていきたいものです。

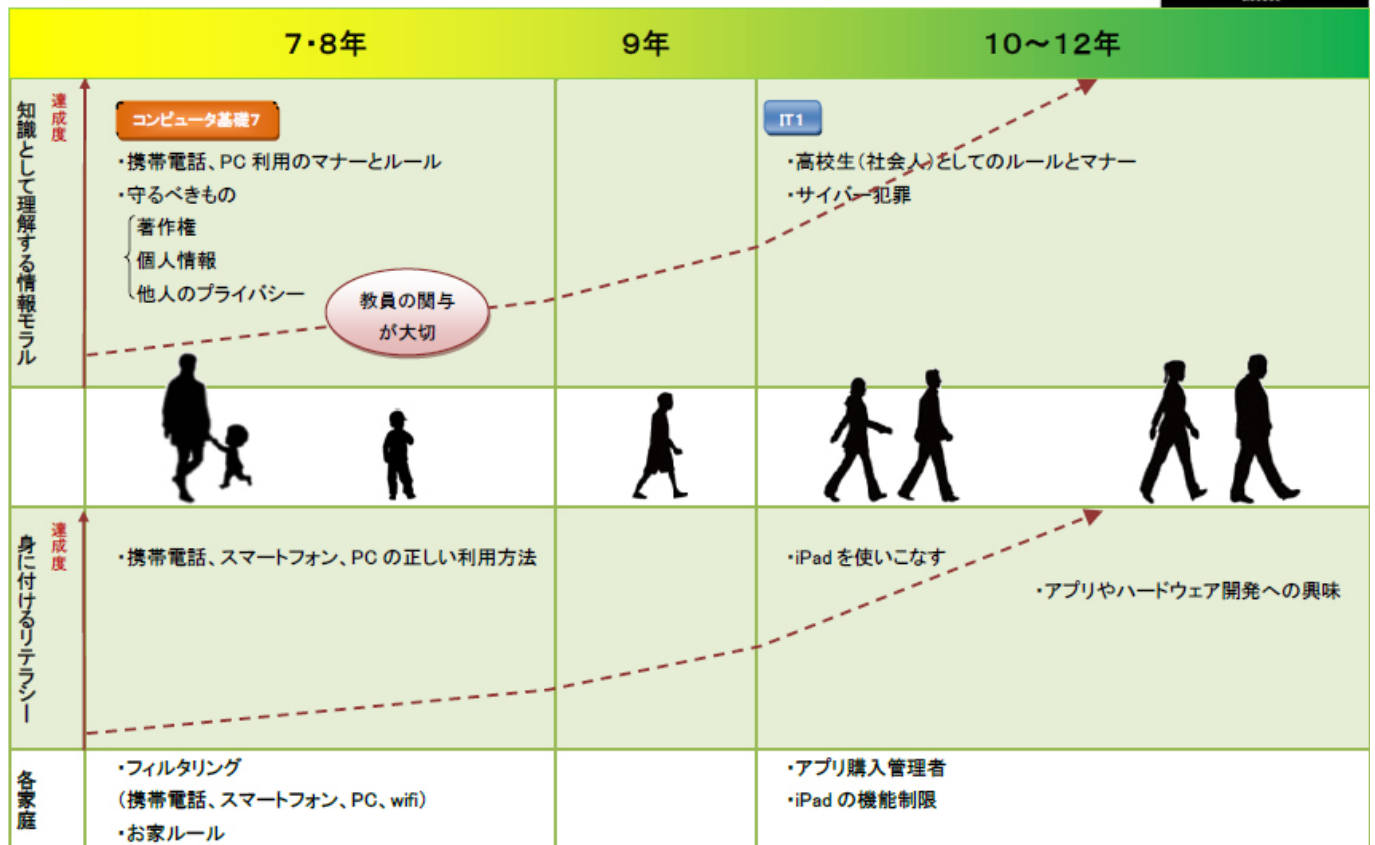
高校生に配布した「iPadユーザーズガイド」にも書いてあることですが、このiPadプロジェクトを始めるにあたっては、SISだからこそ決断できたといえる二つの大事な要素があります。あらためてこの二点について記しておきたいと思います。

一つ目は、SISの学習スタイルです。文科省は2011年4月に「教育の情報化ビジョン」を発表し、その中で、タブレット端末を導入することによって「これまでの一斉学習のスタイルだけではなく『個別学習』『協働学習』のスタイルへシフトする」と書いています。これを見て、少人数の環境で参加型の授業スタイルをすでに確立しているSISでは、タブレット端末が授業に即役立つことは間違いないと確信しました。実際今まさにこのことが証明されていると思います。

二つ目は、SISの教育方針の拠りどころである5 Respectsです。日本国内でもすでに多くの学校がタブレット端末の導入をしたり、検討中であったりしますが、現在、国内での事例のほとん

Digital Citizen Map

(携帯電話・スマートフォン・パソコン・タブレット端末)



どが「学校保管」の形です。しかし(高校生の皆さんはすでに強く実感していると思いますが)このデバイスは学校でもプライベートでも常に使うことができそこ効果があがるものですから、SISでは、導入するのであれば、最初から自宅へ持ち帰ってプライベートでも使ってもらい形で始めたいと考えました。ここには5 Respectsに基づいた学校と生徒との信頼関係ということが大きな鍵として存在します。携帯電話なども、「禁止」するのではなく使う中で適切な使用方法を学ぶという方針をとってきたSOISです。iPadも「完全貸与」することで「自律」と「自立」をも同時に学習してもらえるはずであると考えました。この判断も正しかった、と信じています。なお、SIS_ETTは、今回のiPad導入をきっかけに、以前よりSOISにあった、テクノロジー面における成長の考えかた、つまり、それぞれの年齢の生徒たちにデジタル市民(Digital Citizen)として期待する像をチャートにしてまとめました。上図の通りです。

今後はさらにもう一步、このプロジェクトをよりSISらしいものに発展させていきたいと思っています。それは教員主導ではなく教員と生徒とのチームで取り組む動きにシフトしていくことです。高校三年生の18学期の活動として iPadサポートチームに参加してくれる人を募集中です。教員と生徒とで一緒にこのプロジェクトに取り組めるなら、それはとてもSISらしい活動になると思います。5リスペクトに照らし合わせたマナー問題、お勧めアプリや便利な機能を教え合う方法(ブログ作成?)、困っている人をサポートするデスク開設、など関心を持ってくれる12年生、待っています!

なお、本文中で紹介した、色々な授業でiPadを使っている様子を紹介するビデオは、Moodle上でも見ることができます。コースカテゴリーの「Senri International School」を開いたところで公開しています。

全教室に液晶プロジェクター設置

夏休み中に全教室に液晶プロジェクターが設置され、タブレット端末を使用した授業がすべての教室で実施されています。



The 5 Respects

Respect for Self

Respect for Others

Respect for Learning

Respect for the Environment

Respect for Leadership / Authority

5つのリスペクト

自分を大切にする

他の人を大切にする

学習を大切にする

環境を大切にする

リーダーシップを大切にする

SIS

Australia Home Stay

彦坂のぼる

英語科

今年度のAustralia Home Stay Programは、参加者20名で行われました。春学期を通してMr. Avery、Mr. Rayそして見島先生と事前学習を行い、井藤教頭と彦坂の引率で、例年通り7月上旬から3週間、現地のホストファミリーと生活を共にし、Queensland州のSandgate District State High SchoolとNarangba Valley State High Schoolに10名ずつ別れて一生徒として通いました。

現地では多文化国家を反映し、様々なバックグラウンドをお持ちのご家庭にお世話になりました。各生徒が別々の人種、宗教、家族構成、家庭内の習慣やルールに触れ、当たり前だと思っていたことがそうではないと気づいたことも多かったようです。

学校では、授業は基本的にバディの授業に出席しましたが、1日に1、2回SIS生用の特別授業があり、HFL、PE、アボリジニ文化など様々な事柄を学んだり、日本語の授業で日本文化を紹介したり授業のお手伝いもしました。最終週には両校共にスポーツデイが開催され、SIS生も積極的に参加し、中には大健闘してリレーのメンバーにひっぱりだこになった生徒もいました。

それぞれに友人をつくり、貴重な体験をし、素晴らしい経験になりました。以下は参加者の文集からの抜粋です。

私、武田美優は、今まで生きてきた15年間の中で最も心に残った思い出がこのAHSPだと自信を持って言えます。…心に残った思い出とは、ただ楽しかったから、というのではなくつらい事苦しかったことを乗り越えたからこそ今、一番心に残ったと言えます。…始めの方は毎晩号泣して、「早く日本に帰りたい」という気持ちと「せっかくここに来てんねんから!!」という焦りの気持ちがずっと私を追いこんで、本当にしんどかった時もありました。今考えたら、その時間がもったいなかったと思います。一緒にがんばってる友達のことを考えたり話したりしたら辛いこともフッきれて、普段SISにいる時は感じることは出来なかったみんなの大切さを改めて実感しました。友達だけでなく生まれてからずっと側で支えてくれた家族には本当に今までの厳しさの裏での私への優しさを感じ日本に帰ったら絶対感謝しようと思いました。バディの子も友達もホストファミリーも私の為に色々つくしてくれるのに楽しみなさそうな顔してるのは失礼だし、学校にいれば時間



が経つのも速くてだんだん緊張もほぐれて友達も増えて1日1日過ぎる毎にどんどん楽しさが増していった、2週間目からは本当に速かったです。…自分が今までどんなに小さい世界にいたのか、また、あっちの人達はみんな自分を持って人の恥を笑うこともないし、自分のしたいことはしたい、人の目なんか気にしてられないという生き方で尊敬できます。(武田美優さん)

日本と違う学校なので学校内で見るとくさんの物事が新鮮で衝撃的でした。こういった新しい環境での生活だったのでみんなやっぱり緊張していました。…そんなドキドキしていた生活もバディやその他の友達によって次第に無くなっていきました。Sandgateの友達は皆とても優しくいい人たちばかりでした。3日目ぐらいになると結構学校にも慣れてきて学校が楽しく感じられました。たくさんの友達と受けた授業はとても楽しくて興味深いものでした。SISの授業と比べると全員が授業を楽しんでいる感じでした。授業内容に関しては日本と比べてとても簡単でした。休み時間も生徒達はみんなそれぞれの楽しみたい事をやっていてとても活気に溢れていました。教室移動の時などはたくさんの人たちに声をかけられました。日本の学校に比べオーストラリアの学校は全てにおいて楽しいと僕は思いました。日本の学生が勉強ばかりに追われているのを思うと、文化の違いを感じました。…本当にこの3週間でいろんな事を感じ、学ぶことができたと思います。そしてかけがえのない思い出を作れたと思います。この素晴らしい3週間を経験させてくれた全ての人に感謝したいと思います。またみんなと再会するのを楽しみにしています。(明石圭以君)

ふつうの学校生活もたのしかったです。バディの友達はみんな良い子ばかりで、英語が分からなかった時も、わかりやすい英語で直して話してくれました。もちろん英語をしゃべる力だけでなく、人とコミュニケーションをうまくとる力、仲良くやっていく力、また何事もプラスにとらえようとする力も上達できたと思います。特に、何事にもプラスにとらえる力は伸びたと思います。3週間、たくさん大変なことがありました。でも、いちいちマイナスにとらえていたらしんどくなると思い、もしいやだなと思うことがあっても、いつかそれが自分にとっていいことになるプラスに考えました。今回の3週間は大変なことも楽しいこともありました。たぶんそのどちらも、将来自分のためになると思います。また、機会があればオーストラリアに行って、自分のバディや友達と会いたいです。学びの多い3週間で、よかったです。(栢野まどかさん)



SIS

Summer Camp Report

里山家族

高橋桃花

SIS12年

私の3年間

フィールドレンジャー、里山家族について紹介する予定だったのですが、少し私の話にお付き合いください。

部屋の片付けをしている時、ついつい置いてある漫画や雑誌を読んで、片付けが全然はかどらない…。皆が経験する掃除あるあるですね。(笑) 私もしょっちゅうあります。でも、私の場合、漫画ではなくフィールドレンジャーのファイルなんです。

私はSIS在校生の中で唯一3年連続でフィールドレンジャーに参加した生徒です。10年生の時、バンドを組んだり、キャンプの企画をしたりと、HSIになった途端色々な事に挑戦している友達を見て、自分も何かしたいと思いレンジャーになりました。もちろん、自分が7年生の時に経験したあの里山家族の楽しさを新7年生にも感じてほしいという思いはあります。でも、成長したい、自分を知りたいというのが一番の理由でした。自分の経験値を上げるための参加です。今年のレンジャー初挑戦の人もそうだったんじゃないかなと思います。いざ、ミーティングが始まると知らない先輩ばかりで、マネジメントという役職だった私はすごく不安でした。全てが初めての世界で、何をしたいのかかわからず、はじめの方は言われた事をやることで精一杯でした。でも、先輩達はすごく可愛がってくれて、今思うと皆本当にしんどかったはずなのに、いつも明るく優しく教えてくれて、毎回のミーティングが楽しくて仕方ありませんでした。7年生のために本気でぶつかって、汗水たらして、一生懸命働く先輩達は本当にかっこ良かったです。あまり自分の本心を表に出すのが得意ではない私にとって、本気で怒ったり、泣いたりしている先輩たちの姿は衝撃的でした。でも、本番ではそれがあったから、どんなことが起こってもフォローできるレンジャー同士の絆がありました。1ヶ月で作り上げてきたものがようやく形になって、あまりの嬉しさに人生初の感動泣きをしたのを今でも鮮明に覚えています。7年生やレンジャー、いろんな人たちから「ありがとう」と言われて、その一言一言が私に自信を付けてくれたんじゃないかなと思います。誰かのために頑張ることの楽しさ、苦勞が報われた時の達成感、レンジャーの虜になってしまいました。

11年生になって、即決で参加した2度目のレンジャー。自分の経験値を上げるためなんて頭にありませんでした。単純に7年生に楽しんで欲しい、もっと

ともっと色々な人と繋がりたい、去年よりもっと良い里山家族を作りたい。7年生の楽しそうな姿を見たくて仕方ありませんでした。でも、学年が上がるにつれ、責任感も増します。今度の役職はイクイップメントマネージャー(備品)でした。自分の想像を超える忙しさで、あっという間に終わってしまったように感じました。次から次にやるが増えて、色々な事に気を配って、投げ出したくなる時もありました。でも、どんな時もサポートしてくれる先生がいたり、くだらないことで笑い合える仲間がいたり、一年目よりも濃い時間を過ごせたと思います。キャンプが終わって秋学期になっても、声を掛けてくれる7年生がたくさんいて、「また里山に行きたい!」「レンジャーやりたい!」という声を聞くと、あの時頑張ってた本当に良かったなと思いました。

そして、いよいよ12年生、レンジャー最後の年です。正直言うと、今回のレンジャーは私にとってチャレンジでもありました。初めて最高責任者である村長という役職で、里山家族全体を動かしていくからです。失敗しても、成功しても、悔いのないようにやろうと決めていました。でも、いざミーティングが始まると、全員の良い所を消さずにまとめるのはすごく難しかったです。すれ違いがあったり、全員が気持ち良くミーティングを進めたりするのは当たり前ですが簡単にはいきませんでした。どうしたら皆が一つになれるのか、どうしたら前に進めるのか、どう人を動かし、どんな言葉をかければいいのか、毎日そのことで頭がいっぱいでした。でも、そのおかげで一人一人に向き合うことができたのではと思います。きつい事を言ってしまった時もあったのに、それでも最後までついてきてくれた仲間には感謝の気持ちでいっぱいです。レンジャー恒例の一人ずつ感想を言ってもらった最後のミーティングでは、今まで言えなかった事、嬉しかった事、「来年もレンジャーやる!」、いろんな思いを聞いて、始めはあんなにぎこちなかったレンジャーがこんなに愛に溢れたレンジャーになったんだと思うと、涙が止まりませんでした。こうして、笑いあり涙あり愛ありの最後のレンジャーは幕を閉じました。



レンジャーだからといって皆完璧なわけじゃない。勉強、クラブとの両立……。テストが迫る中、いったい何人のレンジャーが寝不足の状態でミーティングをしていたのか。12年生は進路の事もあり、親を説得するの大変だった人もいました。それでも、毎日のようにミーティングをし、レンジャーをやり遂げられたのは、皆の中で知らず知らずのうちに愛が深まっていたからではないかと思います。失敗もトラブルも沢山あったけど、それ以上に7年生の笑顔を見ることができた里山家族は大成功だったと思います。色んな失敗も後悔も、経験することができた。それだけで私はいいと思います。大きく成長した自分、何物にも変え難い仲間、思い出、里山家族は私に色んな物を与えてくれました。私の青春は里山家族にありと言っても過言ではありません。紀泉わいわい村の優しいスタッフの皆さん、支えてくれた先生方、元気をくれた7年生達、協力してくれた友達、保護者の方々、そして、いくつもの壁を共に乗り越えたレンジャーたち。沢山の人たちのおかげで最高の高校生活を過ごせていると思います。本当にありがとうございます。感謝してもしきれません。

私の里山家族に対する愛はここには書ききれませんが、7年生で里山家族に参加し、3年連続でレンジャーに参加し、4回も里山家族に携われたことは私の誇りです。

最後に、フィールドレンジャー、里山家族はこれからも続いています。来年、再来年とあるレンジャーに参加出来ないのはとても残念ですが、これからのレンジャーにはもっともっと笑顔でいっぱい、愛に溢れた里山家族を作り上げていって欲しいです。

海洋キャンプ

前川さち

理科

マリンキャンプでは徳島にある阿南国際海洋センターに行きました。太平洋を臨む非常に美しい場所です。今回はお天気が心配されましたが、雨には降られたものの丸一日外に出られないという日はなく、カッターやカヤック、ヨットなどほとんどのアクティビティを体験することができました。特に印象深かったのは2日目のカヤックです。最初からスイスイと漕げる人もいれば、乗ったとたんにひっくり返ってしまう人も、特にはじめて参加する8年生は転覆組が多かったのですが、さすがの適応力で30分もすれば海面をすべるように漕いでいました。次の日は筋肉痛で足をぶるぶるさせながら歩いている生徒もちらほら。最初はリーダー(10~12年生)とキャンパー(8~9年生)がなかなか打ち解けられていないよ

うでしたが、1日、2日と経つにつれて、食事の準備・片付けやアクティビティにおいて10~12年生達が彼らに積極的に声をかける姿が見られ、学年を問わず笑顔で会話している姿が多くなりました。キャンプではリーダーがキャンパーをもてなします。彼らはキャンパーをもてなすためにキャンプ前日まで準備重ね、キャンプ中も毎晩ミーティングを行いました。ミーティングの中でお互い意見が合わず、遅くまで議論を重ねる姿が印象的でした。彼らの努力の上にキャンパーの“楽しい”が成り立っていることを感じました。最終日前日の夜の寸劇では打ち解けた8~12年生が息のあった爆笑(?)の劇を見せてくれました。今回のキャンプで学年を越えた友人ができたのではないのでしょうか。今回参加した8~9年生が今度はリーダーとしてこのマリンキャンプに帰ってきてくれるといいな、と期待しています。

食農キャンプ

大治奈央

S/S8年

去年このキャンプに行った人から「コテージきれいだし、ごはんおいしいし、たのしいよ!」と言われ、コテージとごはんが気になり、参加しようと決めました。行く前からしおりを見て早起きだし、大変そうだなと思っていましたが、帰るころにはその大変さを忘れるほど、楽しいプログラムばかりでとてもいい思い出になりました。

到着してオリエンテーションを行い、そのあと、2時間ほどファームを散策しました。そこにはミニブタがたくさんいてとてもかわいかったです。しかし、ミニブタがいる隣にバーベキューのレストランがあり、少しびっくりしました。そしていよいよ最初のプログラムの味覚ゲームが始まりました。味覚ゲームでは4種類の牛乳のにおい、色、味でどれがどの牛乳か飲み比べました。牛乳はどれも同じだと思っていましたが、それぞれにおいが全然違い、味も全然違いました。また、ファームでとられたジャージー牛乳は絶対に濃い!というイメージがあったのですが、実はそんなに濃くなくて全然わかりませんでした。牛乳の味覚ゲームの後は、牧場に行き乳搾りと餌の干し草をほぐしたり、アイスクリーム作りを行いました。アイスクリーム作りは初体験だったのですが簡単にできて、しかも最高においしかったです。乳搾りは一度やったことがあったのですが、その時よりうまくできたと思います。そして、乳搾りを終えた牛たちが私たちの用意した干し草を食べてくれてうれしかったです。ここでは牛乳が自分たちの家庭に届くまでの過程を知ることができました。そのあと、きれいと言っていたコテージに行きま



した。すると予想していた以上にきれいでびっくりしました。そしておいしいと聞いていた夜ご飯をレストランで食べました。とんかつ定食だったのですが、さっき見たミニブタの顔を思い出してしまい少し気が引けましたが、おなかがすいていたので食べるととてもおいしくきれいに全部完食しました。

翌日は7時から作業が始まり、みんな目をこすりながらしいたけを採りました。そのしいたけはこの日の朝食や夕食にも出てきました。おなかが空いてきたころに朝食のバイキング。何十種類もある料理にはソーセージや牛乳などこのファームで作られた新鮮な食材ばかりでおなかいっぱいだけどまだ食べたい!と思うほどのおいしさでした。朝から天気は悪かったのですが、農場に行こうという頃に雨が降ってきてしまい、予定していたじゃがいも掘りができませんでした。だから急きょ乳酸菌液づくりをしました。それはそれで参考になりましたが、じゃがいも掘りが出来ず残念でした。そのあとはウインナーづくりをやりました。ウインナーをどうやって作るのか知らず、「これなんやろ〜?」と友達と言っていたのが羊の腸でびっくりしました。豚肉をその腸に詰めていくのですが途中で腸が破れたりしたグループもありました。でも結果的にみんなおいしいウインナーができ、その日のバーベキューで食べました。

そして最終日、眠たい中牧場に行き馬のお世話をしました。小屋を掃除し、餌の干し草をセットし、ブラッシングをしました。馬の中にもボスがいるらしく、そのボスが餌を食べているところへは誰も近づかずそういう上下関係があることを知りました。そして、ブラッシングをすると馬の毛がきれいになり、スタッフの方が鼻を触ると気持ちいいよ!と教えてくれたので触てみるとぶにゅぶにゅで気持ち良かったです。午前中の最初のプログラムは、バター作りでした。バターの作り方も知らなかったののでどうやって作るのかとても気になりました。すると、ジャージー牛乳の入った瓶を渡され、思い切り振るように言われました。こんな牛乳を振るだけでバターができるのかな?と半信半疑のまま振っていると上に油の塊が浮いてきました。それが油の塊がバターとなりました。それに少し塩をつけて食べてみるとバターのようでした。どの牛乳でもできるのかな?とっていたら実はそうではなくて、普通の牛乳は機械を通してあるのでバターは作れないそうです。

この2泊3日は短い期間でしたが、その短い期間の中でたくさんのことを学びました。ウインナーの作り方や、乳搾りのやり方、馬の小屋の掃除や、バターの作り方など。キャンプから帰った後もウインナーを見るたびに羊の腸を使ってるんだなあとか、バターって機械を通してない牛乳振ったらできるんだと思うようになりました。最初に考えていたコテージきれいだし、ごはんおいしいというだけでなく、実生活でも知っておいた方がいいことを沢山知ることができたのでよかったです。最近は食品のことなどが問題になっていますが、こういう風に自分が食べているものが目に見えると安心して食べられるのでいいと思います。役に立つことをたくさん知ることができるので、ぜひみなにもこのキャンプに参加してほしいと思います。



農家ホームステイ

青山比呂乃

図書館

農家ホームステイキャンプも3年目になりました。8・9年生のための、日本の実際の農家生活体験をするホームステイプログラムです。海外生活はあっても日本の生活体験が少ない人、農業に関心がある人、美味しい野菜を収穫して料理してみたい人にお勧めです。受入先の本当に暖かい農家のお宅に泊って、農作業や家の食事作りなどをお手伝いさせていただきます。

ステイ先の日高川町は昨年9月の台風により、数名の死傷者が出て道や橋も甚大な被害を受け、いまだに町内にその爪痕が残っています。昨年度のステイ先の農家の皆さんもその痛手から回復しきれず、残念ながら今年は受け入れが難しい、というお宅も何件か出ました。一方で、そんな時だからこそ千里国際の子を受け入れよう、と楽しみにしてくださっている農家さんもあり、そのついで、今年新しく引き受けてくださったお宅もあります。町の皆さんとの良いつながりが育まれているなと改めて実感しています。以下は、今年の参加者の感想です。

8年 生越啓人

7月2日から7月5日までの四日間、僕たちは和歌山県日高川町の農家の方々のお家にホームステイをしました。7月2日11時ごろ日高川交流センター(以下交流センター)に到着し、農家の方と対面しました。僕は9年の竹田君と一緒に長岡さんの家に行くことになりました。そのあと、車で連れて行っていただき、早速つる植物がまきつくための網の設置と種まきをしました。網の設置は支柱をまっすぐ打つことができてなくて、難しかったです。夜はすじ肉カレーをいただきました。

翌朝、農協とスーパーへミニトマトを出荷しに行きました。出荷の後、ビニールハウスで2時間、ミニトマトを収穫しました。外は雨なのにビニールハウスの中は蒸し暑く、大変でした。昼食の後、今度は収穫したトマトを箱詰めしました。量を均一にするのが難しかったのですが、楽しかったです。晩は握り寿司をみんなで作って食べました。自分で作った寿司はおいしかったです。

三日目は長岡さんの農休日だったので、農作業は前日と同じようにミニトマトを出荷しただけでした。出荷後、昼ごはんのための餅を作りました。一部の餅はピザにして食べました。その後、日高川町南部を車で回りました。長岡さんの知り合いの農家に行くとイノシシを見せてもらったり、鉄道の廃線跡を見たりしました。イノシシは意外に大きくて、驚きました。

晩は交流センターの向かいにあるふれあいドームで全ステイ先合同夕食会を行い、バーベキューと流しそうめんをしました。どちらもそれぞれの農家自慢の野菜や手作り料理があって、おいし

かったです。食後には花火をして、みんな楽しんでいる様子でした。

最終日の朝、交流センターに集合、活動報告会を開きました。各自が農家での体験を一枚の模造紙に詰め込んでいました。帰るとき、ものすごく名残惜しい気持ちになりました。

僕は、ここで農業や農家ならではの生活の知恵を知ることができました。自分自身、いい経験ができたと思います。

9年 青木宗一郎

僕は、今回農家ホームステイというキャンプに参加しました。このキャンプは、ペアで一軒の農家に畑仕事や家事のお手伝いなどをして、3泊4日お世話になるというものです。電車やバスを乗り継いで約3時間、ようやく着きました。和歌山県日高川町がこのキャンプの舞台です。僕にとって初めての土地で、テレビで観る様な日本の田舎だなあと感じました。交流センターで昼食を終えると、早速お世話になる方々が来られました。僕と同学年の男子が今回、お世話になったのは、各務さんという民宿「かがみ」を経営されているお宅でした。毎年、全国各地や海外からもお客さんが来られるそうです。僕たちは、荷物を預けるとすぐ畑仕事へと向かいました。各務さんは、もともと畑(約300坪)のうち半分は知人に貸していると言われました。なぜなら、去年に台風によって起こった洪水で、たくさんの人の畑や家までが流されたりして莫大な被害を受けてしまい、農作業が出来なくなったからです。幸い、各務さんの畑と家は、高台にあるため大丈夫だったそうです。僕たちも早速、野菜の収穫を手伝いました。トマトににんじん、キュウリなどの野菜を採りました。こちらの野菜は無農薬だということですが、害虫から畑を守ってくれるのは、アマガエルなのだそうです。

二日目は、最後の合同夕食会のための、流しそうめん用の竹の台を作りました。初めての体験でしたが、竹を切るの思ったより重労働で、手が痛くなりました。あっという間に、時間が経ち、台がほぼ完成した時にはもう夜になっていました。

三日目は、台をきれいに仕上げ、周りに少し飾りも付けました。出来上がったときには、とても達成感がありました。その後は、BBQや花火の準備をし、いよいよ合同夕食会の始まりです。まずはホストファミリーを含む全員でレクリエーション!「大嵐」や「だるまさんが転んだ」等で盛り上がり、ファミリーのみんなも楽しそうでした。気合を入れて作った流しそうめんの台は、「すごい!」とほめてもらえて嬉しかったです。でも、みんなそうめんより流れてくるトマトやパイナップルの方を取り合いして受けてました。

四日目の最終日、各ペアはそれぞれポスターを作り、今までの活動を発表しました。それぞれのポスターに意気込みを感じられて、みんな楽しんでいたのがよく分かりました。昼食後は、いよいよお別れです。笑顔で別れたファミリーもいれば、泣いているファミリーもいて、様々でした。

天気にはあまり恵まれなかったけれど、いつもの自分とは違う体験ができて面白かったです。

ドルフィンスイム

浜田紘行

SIS11年

二泊三日のドルフィンキャンプではいろいろなことがありました。朝の7:40に学校に集合し、そこからバスに乗り、その約5時間後に和歌山県串本町に到着しました。串本海中公園に到着し、まずはサンゴや魚の話聞き、サンゴの種類や生態についてたく



さん学びました。その後、シュノーケリングをしに行きました。シュノーケリング用のスーツは本当に着づらくて、みんなが着るのにすごく苦労していました。猛暑の中みんなで海岸まで歩き、次はフィンの履き方の説明を聞きました。ようやくみんなで海に入ることができ、さまざまな種類の魚やサンゴを発見し、とてもいい経験になりました。

二日目は朝6:30に起き、みんなでクジラの博物館に行きました。そこでは約1時間に及ぶクジラについての話を聞き、知識がたくさん増えました。その後は、昼ごはんをみんなで仲良く食べ、再びバスに戻って次はドルフィンベイイスに向かいしました。この日の天気は本当にひどく、雨も激しかったので、ドルフィンと遊べるかわからなくなりました。しかし、天気は僕たちの味方をして急に晴れ、スケジュールは予定通りに実施されました。到着後、一日目と似たような着づらいスーツを着て海に行き、最初はドルフィンの歯や体について学び、ドルフィンとキスまでしました。そして、インストラクターからドルフィンに乗る方法を教えてもらい、ようやくドルフィンに乗ることができました。みんなでドルフィンと楽しく触れ合うことができました。

三日目は一日目同様、串本海中公園に行きました。そこでは水族館飼育体験や海中展望塔見学をしました。カメを抱いて写真を撮ってもらい、海の中にある展望塔でいろいろな魚の種類を発見し、見たことがない魚をたくさん見ることができました。その後みんなで最後の昼食をとり、バスで大阪に戻りました。僕はこのキャンプで初めてリーダーを務め、とてもいい経験になりました。ほかの学年の人とも仲良くなることもできて、あっという間に三日間が終わりました。

100kmウォーク

奥井あゆみ

SIS12年

私は7月2日から7月5日にかけて、100kmウォークのキャンプに行ってきました。今年は10年生が4人、11年生が1人、12年生が17人の合計22人の生徒が参加しました。このキャンプは体力面でも精神面でもかなり大変でしたが、とても貴重な体験が出来ました。

キャンプ本番が始まるまでの数週間は、放課後に参加者全員で集まりキャンプの準備に取り掛かりました。100kmウォークのしおりに載せる資料をまとめたり、ゴールのときに使用する垂れ幕を作ったり、皆で役割分担をしながら数回のミーティングを重ねて



キャンプ当日に向けて頑張りました。

1日目は集合場所である滋賀県堅田駅からその日の宿泊地である琵琶湖コンファレンスセンターまで、琵琶湖を眺めながら約32kmの距離を歩きました。まだ初日だったということもあり、誰もリタイアすることなく全員でホテルに着くことが出来ました。

2日目は朝の6時に起床し、8時にはもう既に歩き始めていました。しかし、天気には恵まれず雨の中歩くことになりました。湖岸道路に沿って北上し、途中で彦根市街を通過しました。一日目に比べて交通量が多く、車に気を付けながらの歩行となりました。この日は35kmを歩き、伊里船という民宿に宿泊しました。この時、既に何人かは疲れを見せ始めていました。

3日目は8時に車で道の駅「みずどりステーション」に移動し、全員が集合してから歩き始めました。北陸自動車道を横手に緩やかな上り道を歩きました。途中で車に乗ってトンネルを通過し、再び歩いて敦賀市街まで歩きました。敦賀市街では二度目となる車に乗って移動しました。何人かは限界が見え始めていましたが、無事に残りの33kmを歩き切ることができ、最後は全員揃って手を繋ぎながら一斉に気比の松原の海岸でゴールすることが出来ました。夜は宿泊先の敦賀観光ホテルの向かい側にある海岸沿いで花火を楽しみました。

最終日は、全員で千里国際キャンパスへ向かうバスに乗りました。途中で幾つかの休憩を取りながら、12時に一日目の宿泊先でもあった琵琶湖コンファレンスセンターで昼食をとりました。昼食が済んだら、100kmウォークに参加した全員で表彰式を行いました。その内容は一人一言ずつ感想を述べ、表彰状を受け取るといったものでした。表彰式を終えたらすぐにバスに戻り、午後3時半頃に学校に戻りました。

私がこのキャンプへの参加を決めたきっかけは、リピーターである友人からの誘いでした。最初は軽い気持ちで参加を決意していましたが、ミーティングを重ねていくうちに歩ききる自信を失ってしまいました。初日はキャンプに誘ってくれた友人と、色々な話をしたり歌を歌ったりしながら、何とか歩ききることが出来ました。しかし、運動が苦手な私はホテルに着くころには自力で歩くことが出来ず、何度もリタイアすることを考えていました。2日目は、疲れの限界を訴え始めた生徒が数人いました。それでも、リタイアを告げる生徒は1人もおらず、学年の壁を越えてお互いに励まし合って仲を深めていきました。私はこの日も友人の声援に背中を押され、リタイアすることなく無事に民宿にたどり着くことが出来ました。3日目はかなりゴールに近付いていたため、何としてでも歩ききると強い思いがありました。しかし、体力面だけに限らず、精神面での疲れが大きかったため頻繁に「辛い」という言葉を口

にしてしまいました。それでも、3日間一緒に歩き、挫けそうなときに一生懸命励ましてくれた友人に何度も勇気づけられ、ゴールすることが出来ました。

私はこのキャンプを通して、お互いに手を取り合って大きな目標を成し遂げることを学びました。その経験を通し、私は精神的に大きく成長することが出来ました。私は決して一人では、100kmを歩ききれなかったと思います。学年を越えてたくさんの人に励まされ、勇気づけられたからこそ諦めずに完歩することができました。これはもちろん生徒に限らず、生徒のサポートに全力で当たってくれた先生方や、快く泊めて下さった宿泊先の協力があってこそこのキャンプでした。本当にありがとうございました。

森の達人

田中 守

理科

今夏僕は森の達人というキャンプに参加しました。今回色々なプログラムがありましたが中でもターザンロープが一番のいい思い出になりました。ターザンロープは生まれて初めて乗りました。初めてながらうまく乗れたのですごく楽しかったです。8年生ながらこういう経験をさせてもらいとても嬉しく思います。またこういう機会があれば参加したいと思います。8年3組森本亜蓮

学校でやるキャンプだってここまでやれる。その挑戦が今年から始まりました。森の自然に近づくために、テントを張って寝袋にくるまり大地に横になる。まきを割り、たき火を囲む。めざすのは、我慢や忍耐ではなく、自然の素晴らしさを肌で感じる、快適なキャンプ。森の中での豊かな生活を、知恵と工夫で作上げていくのがこのキャンプです。楽しさと快適さを追求することに妥協はありません。森の中での最高の生活を、知恵と工夫で作上げていくのがこのキャンプです。キャンプは知的なゲーム。森の中での最高の生活を、知恵と工夫で作上げていくのです。当然、食事にもこだわった…ダッチオーブンでスペアリブステーキやローストチキン。そしてパン。発酵に時間をかけ、手作りのパン釜で焼いたパンに思わず歓声が上がった。森の達人に料理の技は欠かせません。森遊びも本物志向だ。木にのぼり森にロープをはって遊ぶ。試行錯誤の末に出来上がったターザンや森のロープウェイは半端なくおもしろかった。森は遊びの宝庫だ。

さて次は何にこだわろうか。自然の中でおもしろいこと、もっと挑戦してみよう。

今回の挑戦：テントで寝る。タープを張る。カレーと豚汁。パン釜でパンを焼く。ダッチオーブンでローストチキンやスペアリブス



テーキを作る。ミネストローネやクリームスープを本物志向で作る。パンケーキとベーコンエッグの朝食。ロープウェイ作り。ターザン。ブランコ。ハンモック。まき割り。雨の中での森の生活…。

日程 7月2日～5日(3泊4日)場所:千刈キャンプ場 参加者:8年生から12年生36名引率:田中、宮澤、山城、福島

・雨の合間をぬって作業したロープウェイやハンモック、ターザンが思った以上のできあがりで、とっても楽しめました。なにより、あんな大きな遊具を自分たちだけの力で一から作り上げることができるということが驚きでした。森の中で遊んだロープウェイは気持ちよかったし、ハンモックも、ものすごく居心地が良かったです。・私は、あまり鶏肉が好きではないのですが、今回のキャンプで作ったローストチキンは、程よい塩味がして、鶏肉がとてもやわらかくて、ローズマリーのおかげで、鶏肉にいい風味がついて、本当に美味しかったです。・今回のキャンプは楽しかったです!!何回か挫折しそうな時はあったけど、それがあっての最後の成功でした。最後は鳥肌がたつぐらいやばかったです。・母には炊飯器を持っていったら?やホームベーカリー持っていく?などと絶対私には作れないと心配されていたが最後の日などとても完成度の高いごはんを作ることができた。・このキャンプは自分でしなければならないことが多く、大変でした。でも、自分で考えて工夫することができ、楽しかったです。・特にロープウェイが楽しくて、時間があればブランコにも乗りたかったです。そして家に帰ると、すぐに火がつくことの凄さを改めて感じました。・このキャンプに参加以前と以後では自分の中の意識が大分変わりました。基本は自己中心な私が下級生のやり残しを気にしたり…。意外にも程があるほどの11年生ぶりに驚きました。それがこのキャンプの凄さだと思いました、また食のことをやり通した4日間、その意味では多少ながらも失敗したことはあったけれど終わりよければ全て良し!最後の夕食では本当に『達人』になれたと思います!リーダーシップをとるのが苦手な私だったけれど、窮地にたてば声が張り上げることができるし、仕切ることができる、そんな自信をもらったキャンプでした。だからこのキャンプは成功です!・2他の学年の子たちとも想像以上に仲良くなれたのでとても嬉しいです。キャンプが終わるときにはほっとする気持ちと寂しい気持ちの両方がありました。

大河ドラマを旅する

木村郁美

SIS11年

今回私は、サマーキャンプ「大河ドラマを旅する」に参加しました。去年から始まったこのサマーキャンプでは、NHKの大河ドラマのゆかりの地を観光しながら歴史を学びます。第二回となった今回は、2012年の大河ドラマ「平清盛」のゆかりの地である広島県へ行ってきました。

大河ドラマの主人公・平清盛(1118～1181)は、平安時代末期に活躍した武士です。貴族中心の社会であった当時、清盛は武士として初めて太政大臣となり、貴族の上に立って革新的な政治を行いました。そんな清盛の生涯の功績の中で注目されるべきは、交易を通じて国を豊かにしたことです。清盛は当時の中国・宋との交易を盛んに行うことで、巨万の富を築きました。今回訪れた広島県も、清盛が交易のために発展させた土地の一つです。

このキャンプでは、3、4人で構成されたグループごとに旅行のスケジュールを作り、当日はそのスケジュールに沿っ

て観光をします。私は同じ11年生の逢坂亜美さん、岡本彩さん、田中シェルさん、そして辻村涼子さんとグループを組み、1・3日目に広島市内、2日目に宮島を観光することにしました。

7月2日、新幹線で広島へと到着した私たちは、グループに分かれてそれぞれの目的地へ向かうことになりました。私のグループは、まず広島名物・お好み焼を食べるため、「お好み村」という場所へ向かいました。お好み村は、一つの建物に沢山のお好み焼屋が入っています。私たちは、「厳島」という名前の店に入りました。広島のお好み焼は、麺やモヤシが入っているのが特徴で、いつも口にしていて大阪のものとはまた違った美味しさでした。次に向かったのは、戦国武将・毛利輝元の居城であった、広島城です。まず、二ノ丸を見学し、次に資料館となっている天守閣を見学しました。天守閣からは、広島の景色が見渡せることができました。広島市内を観光した後は、路面電車でホテルの最寄り駅である宮島口という駅まで行きました。駅のすぐ側には、二日目に観光に行く宮島へのフェリー乗り場がありました。

ホテルで夕食を済ませた後は、広島民俗学会の岡崎環さんのお話を聞きました。平清盛や平安時代についてや、宮島の歴史について学ぶことができ、とてもよかったです。

二日目は、フェリーで宮島へ行きました。宮島は、島そのものが世界遺産に登録されており、平清盛が平家一門の繁栄のために造営した厳島神社で有名です。フェリーからは、海上に浮かぶ大鳥居が見えました。この大鳥居を囲む海水は、引き潮の時間帯になるとなくなるので、その時間帯には大鳥居の近くまで歩いて行くことができます。しかし引き潮になるのは午後なので、私たちはそれまで他の場所を観光することにしました。宮島に着いた私たちを迎えてくれたのは、野生の鹿たちでした。私たちが歩みよっても、鹿たちは怖がらず、むしろ私たちに着いてくるほど人間に慣れていました。人を追いかける、お土産の入った紙袋を食いちぎるなど、鹿は狂暴で、逆に私たちの方が鹿を警戒していました。

まず向かったのは、大鳥居と同じく海上に浮かぶ厳島神社です。厳島神社は、平安時代の貴族の住居、寝殿造と同じ構造を用いたユニークな神社です。社を囲む海と社の朱色が、神社とは思えないほどの豪華さを醸し出していました。

宮島では、大河ドラマの特別展や、宮島の歴史資料館を回っ



たり、広島名物の紅葉まんじゅうの手作り体験をしたりしました。紅葉まんじゅうの手作り体験は、作り方を間違えるなどのトラブルが多々あり大変でしたが、できたての紅葉まんじゅうはとても美味しかったです。

カキクリームコロッケや、揚げ紅葉まんじゅうなどを食べ歩きもしました。宮島の食べ物はどれも美味しかったです。

宮島を満喫しているうちに、引き潮の時間帯になりました。朝は海水でとても行けなかった大鳥居の側まで歩いて行き、大鳥居を潜ってみると、改めてその大きさに驚かされ、感動しました。

二日目の晩は、プレゼンテーション大会を行いました。大会では、各自が宮島や広島についてや、大河ドラマの時代である平安時代についてのプレゼンテーションを行いました。どれも興味深いものばかりで、とても勉強になりました。

最終日は、広島市内を観光しました。私たちのグループは、原爆ドームと、平和資料館に行きました。広島市内が活気に満ち足り、戦争の面影を感じさせない中で、この場所だけが、原爆が投下された1945年で時間が止まっているように思えました。当時の姿のままの原爆ドームや、平和資料館で展示されていた、原爆のことを描いた絵や文章を眺めていると、いかに戦争や核兵器が残酷なのかが分かりました。

原爆ドームを後にした私たちは、広島駅から新幹線に乗り、新大阪駅にて解散しました。今回のキャンプでは、たったの3日で、平清盛の生きた平安時代から、戦国時代、そして近代の歴史について沢山のことを学ぶことができました。また、キャンプの中では、沢山のいい思い出を作ることができました。

キャンプを盛り上げて下さった先生方、現地の人々、そしてメンバーの皆には、感謝の気持ちでいっぱいです。学べる上に楽しい、とても充実した3日間でした。

チャレンジキャンプ

平井太佳子
保健体育科

このキャンプは長野県で行われ、日程も4泊5日、費用も5万8千円とかかるため参加者は毎年多くはない。多くはないが、参加した生徒は学校の中では得ることのできないものを経験して帰ってくる。それは北アルプスの大自然であったり、くじけそうになる自分を奮い立たせることだったり、昨日まで知らなかった仲間の心遣いであったり、粘り強いインストラクターの指導であったり、人によって、時によって異なる。しかし、毎年言えることは、「何か」に触れ、「何か」を掴んで「何者か」になって帰ってくるということである。

5日間の大半を占める北アルプス登山は参加者に大きなインパクトを与える。しかし、決してこのキャンプが「登山キャンプ」ではなく「冒険キャンプ」でもなく「チャレンジキャンプ」であるのは、登山や冒険が目的なのではなく、登山やアウトドアでの冒険のように思える活動を手段として、「自分」に「チャレンジ」して「何か」を発見し、「何か」を掴むことを目的としているためである。

以下参加者の感想である。

私は運動が得意ではない。それでも、このいかにも肉体的に一番厳しそうなキャンプを選んだ理由は、「自信がないあなたにこそ参加してほしい」という文を見たからだ。

このキャンプでやった主な活動は、ロッククライミングと登山遠征だ。きつとともしんどいのだろうと予想してはいたが、実際やってみたそれは、しんどいなどという生半可なものではなかった。見



上げていたときには見えていたルートが、いざ上りはじめるといきなり分からなくなる。平坦な道なら何てことのない距離が、永遠かと思うぐらいに長く感じる。何度も諦めそうになった。

しかし、それでも私がキャンプの全日程を無事終えられたのは、一緒に参加した仲間達の存在によるところが大きいと思う。20kg近い荷物を担いで山を登るときや、足場がなく最後の一步が踏み出せないとき、声援を贈ってくれ、荷物を持ってくれた。

キャンプを終えて、できないことは無理せず仲間に助けを求め、代わりにできることを精一杯やろうと思うようになった。そしてそうやって課題を乗り越えたことそのものが、「私はあの山に登れた」という自信に繋がったと思う。

彼女はさらに「今までは無理だと思ったら逃げる道を模索した。でも、今は乗り越えるにはどうしたらいいか、模索することが必要なのだと思えるようになった」と締めくくっている。このキャンプの後彼女は留学し海外で勉強をしている。言葉の壁、習慣の違い、多くの困難に直面しているだろう。しかしきっと「乗り越える方法」を見つける努力をし続けているに違いない。

写真文芸帳

備中高梁
谷春葉
SIS11年

まさか写真を撮るために山に登るとは思ってもいませんでした。暑い日差しの中、デコボコの山道のアップダウンに悪戦苦闘している私たちは備中高梁に行く前に備中松山城に登っていました。今回の行き先は備中高梁と備中松山城、参加者は女子7人でした。8:106はじけるような気分の高揚をしてカメラ会員証のように持ってキャンプのはじまりを告げる集合写真に写りました。



計8人に対し一台の中型バスを独占し、約3時間の贅沢旅行の感覚で揺られながら、蟬の音が響く備中松山城の登山コースの入口にゆったりとした時間の流れに乗って到着しました。しかし、山は甘くなく学期末のテスト疲れとは違ったハードさが待ち受けていました。やっとたどり着いた天守閣では登ったときの疲れが気持ちの良い清々しさと達成感に変わっていました。人里離れた山奥の城の変わってないその姿はくる人をタイムスリップさせると共に時の流れを引きとめようとしている様に感じました。

お昼はバスの中でワイワイと食べ、午後は備中高梁を見学しました。知らない時代に懐かしさを抱かせるような優しさを持ったまちでした。武家屋敷では、実物大のおじぎ人形や、立派な庭には松の木が胸を張ってたたずんでいたりました。写真を撮って残したい瞬間がたくさんありました。

その後、3日間本を作り学校に編集作業で忙しかったけれども、思い出や忘れたくない瞬間を両手で持ったその本の重みは嬉しいものでした。

心の旅

廣澤沙紀

SIS12年

私は7/2～7/5の4日間、和歌山県伊都郡高野町にある恵光院に滞在し、自分の進路や人生をじっくり考え見つけ直してきました。私は4月から12年生になり、大学でそして将来何を勉強したいのかなどを真剣に考えるようになりました。考えると同時に大学受験の準備も始めなくてはならないと、一年前とは比べ物にならない程忙しい毎日になりました。そのような毎日には本当に時間があっという間に経ってしまい、何か大切なことを忘れていたようにも思えます。忘れていた大切な何か、そして自分をもう一度見つめ直すために今回「心の旅」に参加しました。

キャンプ初日は、正午に恵光院に到着し、昼食を摂った後数珠作りをしました。自らの手で磨いた珠を紐に通し、結び世界でたった一つの自分だけの数珠が完成しました。そして、私達が恵光院で初めて体験した修行は「阿字観」です。これは真言密教の瞑想法のひとつで、呼吸を意識することで頭の中の雑念をなくし、宇宙との一体感を実感します。毎日朝と晩、合計で6回阿字観を行ないました。なるべく早く習得出来るように努力しましたが、そこで現れたのが睡魔。恵光院から見渡す景色は緑が多く、本当に綺麗で呼吸を意識して数えるうちに最初の方はついうとうとしてしまいました。ですが、数を重ねるうちにまだまだやれる、そのように感じられるまでもなりました。その後の夕食では、人生で初めての精進料理を体験しました。肉、魚を使わない料理のため質素だろうと想像していましたが、そんな私の想像とは裏腹に本当に美味しく、お腹がいっぱいになりました。そして私が心の旅で一番楽しんだ時間が、毎晩計3回あったレクリエーションです。レクリエーションではお坊さんと一緒にお話をしたり、ゲームをしたりしました。お坊さんと聞くと、真面目で堅そうなイメージがありましたが、実際にお話をしてみると本当に面白い人達ばかりで、とても楽しい時間を過ごしました。

2日目からの朝食後は毎日30分間作務がありました。拭き掃除や掃き掃除をしました。長い廊下の拭き掃除をした時は皆靴下を脱いで、まるで一休さんになったかのように一生懸命掃除をしました。作務の後は、写経と読経を行ないました。皆それぞれのペースで書き進めていたため、集中することが出来ました。ちなみに写経は私の一番好きな作業でした。書道をしているかのよう



で、気持ちを落ち着かせることが出来ました。写経の後は、奥の院へ参拝に行き、不動堂や金剛峰寺へ行きました。教科書で見たことのある有名なお寺にも行けて嬉しかったです。

3日目は午前と午後それぞれ3時間ずつ、計6時間の自由行動がありました。午前中は自転車をレンタルして、2日目に回りきることが出来なかったお寺などにお参りに行きました。その中でも最も印象に残っているのが、大師協会です。大師協会では修行者・信者としての守るべき戒を授ける儀式「授戒」を経験しました。その時お坊さんから聞いたお話が今でもとても印象に残っています。午後はカフェに行き、友達とゆっくりとお話をしてからお土産を買いに行きました。私は高野山で有名な胡麻豆腐を家族に買いました。夜は奥の院で肝試しをしました。奥の院にはたくさんのお墓があったので、本当に怖くて気が重くなりました。ですが、住職さんに言われたように平常心を保ちながら落ち着いて歩くと怖くありませんでした。

4日目は作務の後、住職さんからお話を聞き、昼食を頂いてから恵光院を後にしました。時間ばかりを気にして過ごしていた毎日から少し離れて、落ち着いて過ごした4日間は本当に有意義でした。周りの人に左右されて物事を考えるのではなく、自分が思っていること、考えていることをすべきだと思いました。自分の気持ちをもっと大切にしていくなさうと考えました。引率して下さった井上先生、土佐先生、そして何よりも恵光院の皆さんのお陰で高校生活最後のキャンプは私にとって最高の思い出になりました。ありがとうございました。

SIS秋学期帰国生

入学広報センター

《国別》		《学年別》	
アメリカ	11	7年生	1
カナダ	1	8年生	7
ドイツ	1	9年生	7
イギリス	1	10年生	2
中国	1	11年生	1
台湾	1	5学年計	18
シンガポール	1		
国内(インターナショナル スクール)	1		
8ヶ国計	18		

Kansai High Schools Model United Nations

From the i-level MUN class

From June 21st to 23rd this year, our class participated in the 22nd Annual KHSMUN (Kansai High School Model United Nations). Over 330 students from 13 schools represented over 50 countries. We really appreciate the great opportunity we had to participate in such a wonderful conference. It felt like a once in a lifetime experience.

This year, the main agenda was Protecting the Rights of the Child and the topics were child soldiers and child labor. Through these past three months, we got to learn the reality of children in the world in a new way. It was way beyond our imagination and we just could not believe that children in this age are really suffering in the same world at the same time. Even with every second that passes as you read this article, three children somewhere die due to largely preventable causes. Knowing this fact might make you feel like you want to save the children, but it is actually a very difficult problem. At the conference, we learned that every nation has a very different situation and government policy, and that it is harder to recognize the facts if we keep looking at the problem from only one perspective. As you read through this article, we hope you will think about what you can do. Imagine those children and feel something for them. Please sit back and read this article until the end. It will only take five minutes and it will be worth it.

6月21日から23日にかけて国立京都国際会館で行われた、第22回関西高校生模擬国連(以下、KHSMUN)に、SISから18名が参加した。今回のミーティングは、330人以上の生徒が、50カ国以上もの代表として13の学校から参加し、過去最大級となった。普通の高校生活を送っていたら決して経験できなかったようなこの貴重な機会を設けてくださったすべての方に感謝したい。

KHSMUNのテーマは毎回変わるが、今年のテーマは子どもの人権保護についてであった。MUNの授業が始まってから今までの3ヶ月で私たちが学んだことは今まで知らなかったことも多く、またそのどれも私たちの想像を遥かに超えており、目を疑うものばかりであった。私たちと同じ年代、あるいは私たちよりもっと小さな子どもたちが、苦しんでいるのだ。今あなたがこの記事を読んでいる間、3秒に1人子どもが死んでいる。これを知ること、きつとあなたは子どもたちのためになんとかしなければと思ったことであろう。しかし、現実はそのような簡単ではないことも私たちはKHSMUNで学んだ。国はそれぞれ違う方針を持ち、苦しい状況も続いているところが多い。その中で私たちが本当に必要なことは、一つの視点だけにこだわらずにいろいろと考えることだ。他の国の立場に立って考えてみよう。あなたに何ができるか考えてみよう。子どもたちの立場に立って見て彼らを感じてみよう。そしてこの記事を読んだら最後まで読んでみよう。5分しかかからないだろう。しかしその5分は世界を救う第一歩となるのだ。

TOPIC ONE: CHILD SOLDIERS

Issue #1: Rescuing Child Soldiers

About the Problem, from the Delegates of Norway



いま世界中の戦場で、子どもの兵士が前線に立っている。大人よりも安上がりな勇敢な兵士になるという理由で、軍や武装組織が好んで子どもを徴兵するためだ。子ども兵はアジア、アフリカ、中東、中南米などの紛争地域で現在も確認されており、ここ10年間で世界で数十万人の子どもが紛争における戦闘で亡くなっている。子ども兵らは、常に不衛生で食糧も少ないという厳しい環境のもとに生きなければならず、強制的に危険な役割を担わされ、戦うことを余儀なくされている。彼ら子どもが豊かな人生を送るためには、彼らの権利は大切に守られなければならない。By Reika Nitta

There are still about 300,000 child soldiers in different parts of the world including countries in Asia, Africa, the Middle East and Latin America. Child soldiers are used as tools like shields without absolutely any respect for their lives. It is reported that some children have been forced to kill their parents, friends, or forced to take drugs. Many are raped. There are even instances of children being forced to kill their family so they will have no one to run away to. They are forced to take drugs so they will become addicted and not want to run away. The reason why children are recruited is because they cost much less than adult soldiers, it is easy to get children by abduction and they are easy to brainwash. The world should focus on this problem and work hard to solve the problem of child soldiers. By Haruka Kiyohiro

About the Solution

かけがえのない子ども達を戦争に巻き込まないでほしい。そのために子ども兵を救出する。これは軍の武装を解除し、解隊することである。これを行うためにはまず、戦争を止めることからだ。しかし私たちには戦争を止めることも、軍の武装解除も、解隊することもできない。それでも私たちは「知る」ことができる。世界市民一人一人が子ども兵に対して問題の意識の目を向けることが、この問題の解決の糸口になる。

We do not ever want children to go into armed conflict for any reason. No child should ever be involved in any form of



armed conflict. Child soldiers are denied the opportunity to be children. Rescuing child soldiers is about demobilization and disarmament. The first thing we need to do is negotiate peace, or at least a ceasefire, in an attempt to stop conflict. Even if we as individuals can't always directly do anything about it, we CAN raise public awareness and take action such as contacting government members. Why is it important to raise public awareness? It's because it's the first step. Turning your eyes toward the problem is the starting line of the race to solve this problem.

Issue #2: Rehabilitating Child Soldiers

About the Problem, from the Delegates of the United States

UNESCOによると1998年から2008年で約200万人の子供が犠牲になっており、その結果約600万人が身体障害を負っており。その中の多くは14歳から17歳の児童で、9歳の少年兵が発見されたとの報告もある。彼らの多くは軍で薬物を与えられ、薬物中毒に苦しめられている。また、若い年齢で戦争を間近で見たことによりトラウマを植えつけられ、人と会うことさえ困難になっている子供たちもいる。その他にも、親や村の仲間を殺すことを強いられたり、女の子に至っては性的搾取の結果、家族に戻ることを拒否されて受け入れられないことも多い。このような子供たちが世界にたくさんいて、依然として問題が解決されていないことはとても遺憾に思う。By Kenichiro Oka

According to a recent UNESCO report, between 1998 and 2008, an estimated 2 million children were killed in conflicts and 6 million were left disabled. Most of them were aged between 14 and 17, some were as young as 9. Also large numbers of them were affected by drug addiction and often subjected to cruel, inhumane treatment. "When I was [a] 12 year old boy, they caught my mother and father, and then killed my father in my presence" (a former child soldier in Sierra Leone). Today, 40% of child soldiers are girls and many of them contract HIV or AIDS after being raped. Some of them also become pregnant. As with drug addiction, the mental trauma never goes away. Sometimes the children's own families won't take them back because they have killed, or the girls have children of enemy soldiers, or they are addicted to drugs. By Mizuki Matsuura

About the Solution

現地に行かなければこの問題の解決に協力できないというわけではない。日本にいる私たちにもできることがある。人々のこの

問題への関心を集めることができたなら、多くの募金を集めることができ、それらの金銭的援助によってUNESCOなどの機関が現地の人々に「少年兵問題」への理解を深めるためのレクチャーを行い、解放された少年兵が社会復帰しやすい環境を作ることができる。また、彼らの抱えるトラウマを解消するための治療を行う施設をサポートすることもできる。一人ひとりでは大きなアクションが起こせなくても、大勢の人の関心を集めることができたなら必ず少年兵問題に苦しめられている子供たちを救うことができるはずである。

We can endeavor to solve this problem. Even though we are in Japan, there are many things we can do. If we raised public awareness, we could collect a lot of donations and then some international organizations, like UNICEF, could give lectures in conflict areas where child soldiers are being used to create a better environment for reintegrating demobilized child soldiers. Also, we can support centers which help to remove children's trauma. It is difficult to take action by ourselves but if we cooperate together, it must be possible to rehabilitate children who suffered as child soldiers.

TOPIC TWO: CHILD LABOR

Issue #1: Defining Acceptable Conditions for Child Work

About the Problem, from the Delegates of Kenya

現在、全世界の約150万以上の子どもたちが過酷な環境下での労働を強いられている。その形態は様々であり、プランテーションにおける奴隷的使用から、内戦地などにおける兵士としての利用、性的搾取などが主な例として挙げられる。私たちが暮らしている日常の中では想像もつかない、俄には信じがたいことであるが、そのような惨然たる現実が、地球の裏側では確として存在している。

諸国において、児童がそのような苦役を科せられるようになったのには、共通の経緯がある。

貧困が大人たちの児童に対する文化的解釈を歪曲させ、貧困が紛争を生み、子供たちを労働力へと変えたのだ。By Seijun Kanemoto

Today, more than 1.5 million children are forced to work in hazardous conditions. The forms of hazardous work include hard labor as the equivalent of slaves, prostitution, trafficking and other illicit activities such as begging and having to give the money away, and selling drugs. In parts of the world, things are happening to children that we cannot believe when we compare it to our own peaceful lives. The reason why children are often willing to become laborers and work in hazardous conditions is poverty. It changes adults' perceptions in a bad way, causes hundreds of wars and enables hazardous child labor. By Maho Tanigawa





About the Solution

ではそんな児童労働をどうやって解決すればいいだろう？ MUNのミーティングで私たちはいくつかの基本理念を前提とした答えにたどり着いた。そのなかには児童労働の問題を抱えるすべての発展途上国にもっと児童労働を改善する行動をとらせることがまず一つ、つぎに児童労働の改善や子どもの権利の保護に力を入れているNGO(非政府組織)への世界各国の政府や会社からの援助を要請することが挙げられた。いくつかの解決策は数十年にわたる長期的なものにもなるだろう。だが先にも挙げたように貧困を解決し、大人たちの子供に対する文化的解釈を正すことが最も重要なのである。それらを踏まえて上で、これ以上児童労働を増やさないためには世界が協力して真剣に児童労働の解決にむけての対策をとっていくことが大切なカギとなるだろう。By Yuki Yoshigata

So how can we possibly find a solution for child labor? We got a few answers through MUN meetings that developed into the basic ideas for addressing the current conditions. First encourage all the developing countries which have the problem of child labor to take action that will immediately improve this problem. Next, we should urge developed countries and big multinational companies to support NGOs (Non Government Organizations). Several resolutions will be needed and it will take a long time but the most important thing we have to do is solve poverty and recommend adults to put the situation right so that all cultures understand how to protect the rights of the child. World leaders must work hard to decrease child labor, and they must start by taking this problem seriously. By Daichi Yamamoto

Issue #2: Educating Children as a Means to Escape from Poverty

About the Problem, from the Delegates of Viet Nam

世界では未だ貧困が原因で、学校に行けずにいる子どもたちが33億7千万人もいる。そういった現状をふまえて私たちベトナムは、子どもに教育を受けさせることこそが貧困を終わらせる最重要点であると強く考える。全ての子どもたちは同じ地球に生きているのである。そして教育を受ける権利を持っているのである。先進国に住む子どもたちは何不自由なく教育を受けているが、一方で自分たちとはかけ離れた環境で生きている子どもたちがいることも事実だ。あなたは彼らの置かれている現状を想像することができるだろうか。発展途上国に住む子どもたち、特に娘たち

は両親の伝統的信仰が理由で労働を強いられている。また、ほとんどの家庭が娘ではなく息子への教育に重点を置いているのだ。私たちは、全ての地球市民がこの問題と向き合う必要があると考える。そして今ここの問題に対して立ち上がるべきではないだろうか。By Ikumi Yamashita

Nowadays, there are still nearly 377 million children who are not able to go to school. Viet Nam strongly believes educating children is the key to ending the global problem of poverty. Can you imagine that even though we are live in the same world, impoverished children live in such different conditions? Children in developed countries are able to go to school but in many developing countries, some traditional beliefs cause parents to keep their children, especially their daughters, at home. Many of them focus on boys' education much more than girls. We think this is an issue that everyone should think about once more. By Rika Konishi

About the Solution

教育は子どもたちに知識を与え、貧困から抜け出す手段の一つである。

そのために私たちはすべての子供たちが平等に教育を受けられる環境をつくる必要がある。世界には貧困、伝統的価値観などの理由で教育を受けられない子ども達がいる。彼らは学校を建立したり学費を無償にしたりすることによって教育を受けられる。そして教育をうけられた子どもは知識を得て自分たちの人生に役立てたり、またその知識がいい仕事へつかせたりできると推測する。まずはより多くの人たちにこの問題を知ってほしい。これは決して一人の力ではできないことである。そしてたくさんの人が国際団体への募金面で協力してほしい。

Very simply, education gives knowledge and is a way to escape from poverty. We need to establish a global society in which all children get an equal education. In the world, there are many children who cannot get an education because of poverty, traditional views about girls, a belief that school is irrelevant and many, many other reasons. Many more children could get an education if we built more schools and offered free education. After they get knowledge, they can use that knowledge in their life, whether it is to help them farm more efficiently or to get an office job. The solution involves money and an awful lot of it. We are aware that the process of solving this issue will be slow but if we develop global education, we can develop a healthier global economy too. It will need the co-operation of people everywhere. By Marika Fujisaki and Yoko Fukai



SIS 親善大使としてハンブルク訪問

岩澤直美

SIS11年

私は2012年7月2日から7月28日までの期間、大阪市の親善大使としてハンブルクのドイツ文化センター (Goethe Institut) へ派遣され、語学研修をすると同時に、現地の人々や文化と触れ合う機会をいただきました。今回の経験は私にとって非常に貴重なものであり、私の世界観や価値観を変える大きなきっかけとなりました。

私は中学校時代、父の転勤のために3年間ドイツで英語の国際学校へ通っていたことをきっかけに、帰国後はドイツでの経験を生かしながら本格的にドイツ語の勉強を始めました。昨年10月に大阪ハンブルク友好都市協会の主催で行われた「第22回ドイツ語スピーチコンテスト」に出場し、「自然が私たちにくれるものー未来の私たちのエネルギー」といった演題でドイツ語を使って自己表現に挑みました。結果、ハンブルク友好都市協会長賞を受賞させていただき、今夏にハンブルクへと派遣されることとなりました。

2012年4月から6月末にかけて、大阪ドイツ文化センターでの語学講座を受講させていただき、出発前の準備をすることとなりました。以前からドイツ語の勉強に励んでいましたが、大阪での語学講座では重要な点をわかりやすく教えていただき、非常に効率よくドイツ語の力を伸ばすことが出来たのではないかと思います。ハンブルク友好都市協会長賞受賞後もさらに語学に力を入れていた私にとっては貴重な時間となりました。また、大阪市役所への表敬訪問の際、他国へ派遣される親善大使の方々とも交流をする機会もあり、改めて自分の役目がどのようなものであるのか考え直すことが出来ました。

到着後は、ホームステイ先で生活をしながら、平日はドイツ文化センターの語学講座を受講させていただきました。一般家庭で生活を現地の方と共にすることで、ドイツの生活習慣や文化の違いなど体験することが出来ました。また、日常会話など、さらにドイツ語を使用する機会にもなり、1ヶ月のドイツでの生活に大きく貢献してくださりました。現地の人たちの生活のあり方を体験することで、日本との違いを身にしみて感じる事ができました。

ドイツ文化センターのスタッフの皆様はとても親切な方たちで、先生方も非常に分かりやすく熱心に教えていただきました。授業は少人数制であり、一人ひとりに指導のいくような教育をしていただきました。多くの留学生が集まり、ともにドイツ語を学ぶ環境のなかで、私は世界中からの大学生から社会人のかたと出会うことができました。国籍や年齢は違っていても、ドイツ語を学びたいという気持ちは全ての方に共通するものでありました。片言のドイツ語で互いにコミュニケーションをとりながら、それぞれ自分たちの背景や国の文化についてなど知識を交換する機会も多くあり、とても興味深い経験をする事ができました。私のクラスにもフランス・スペイン・ペラルーシ・チェコ共和



ドイツ文化センターとクラスメイトたちと



ラートハウス(Rathaus)と呼ばれるハンブルク市役所の前

国・トルコ・イラクなど各国からの受講者がいましたが、すぐに仲良くなることが出来ました。

また、ドイツ文化センターでは毎日ハンブルクにある美術館や博物館、観光地などを訪問するプログラムが用意されていました。私の授業は毎日午後にあったので、午前中は積極的にこれらのプログラムに参加し、現地の歴史や文化などを学ぶことが出来ました。その中でも特に興味深かったのはハンブルクの歴史を紹介しているハンブルクミュージアム、アルスター湖の隣にある緑豊かなアルスターパーク、そして毎週日曜日の朝に開催されているというアルトナの魚市場でした。ハンブルクだからこそ存在するこれらの場所には天気の良い日には街中から人が集まってきていました。街中どこにいても素敵な自然と触れ合うことができ、大都市でありながらもそも緑を守りつつ、魚市場のような伝統的な行事や習慣なども大切にされているのだと感じることが出来ました。

ハンブルク市役所を訪問した際には、日独交流に力を入れている方々ともお会いすることができました。当日は桜のプリンセスと呼ばれる代表者とも交流を交わし、互いの国の文化や歴史などを共有する機会があり、ハンブルクとドイツについての知識がいつそうに高めることが出来たのではないかと思います。ハンブルクの中心にあるともいえるハンブルク市役所には多くの観光者が訪れ、見学を希望するほどの堂々さとそのきれいな造りでした。内部を案内していただいた際にも、それぞれの部屋の特徴やそこに刻まれている歴史を説明していただき、関心するばかりでした。

1ヶ月お世話になった方々とも別れの挨拶を交わし、無事に帰国することができました。今回体験した多くのことや、出会った世界中の人たち、そしてなによりもハンブルクで学んだ言語やその土地の習慣、文化、歴史などは私の中に深く残ることになりました。長いようであつという間に過ぎてしまった1ヶ月でありましたが、この経験を活かし、これからも勉強にも励みたいと思っています。最後に、大阪市国際交流推進担当の方々、そして、大阪独日協会、大阪ハンブルク友好都市協会、大阪国際交流センター、ドイツ文化センターとルフトハンザの皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

SIS Schau ma mal! 留学は好き？

オーストリア留学報告

松井正太郎

SIS12年

そもそもオーストリア、という国を知る人はあまりいない。たいがいの人がオーストラリアやドイツと間違われる。オーストラリアはいわずもがなであるが、ドイツとも、言語や民族がおなじであるとはいえず、プロテスタントとカトリックという宗教の違いがある。また、ドイツより南に位置するため、オーストリア人には南国の陽気な気質もより強く見られるような気がする（北ドイツの人をあまり知らないが）。まず留学しようということを思い立ったのは8年生のときだったろうか。そのときはどこに留学するのかなどと考えておらず、ただ漠然と今まで経験したことのない生活を送り、異文化にふれてみたいと思っていなかった。しかしモーツァルトやシューベルト、J.シュトラウスの音楽にのめりこんでいくうちに、彼らの故郷オーストリアに興味を抱き始めた。そういやクラシック音楽は異文化ではないか、と勝手に自分の頭の中で論理を練り上げた結果、留学先はオーストリアしかないと思った。ただし、自分には音楽留学なんておこがましいと思っていた、というよりそんなつもりは毛頭なかった。ただ普通に交換留学生として、一般家庭に配属され、地元の学校に通うというプログラムであった。自己紹介文にヴァイオリンを多少弾きます、モーツァルトやウィーン・フィルの音楽のすばらしさが云々、ということを書いて送ったものの、留学直前までどのような家庭に住まわせていただくことになるのかは、つゆ知らず。ホストファミリーがカタログでホストしたい留学生を選ぶのだそうだが、ヴァイオリンを弾くアジア人、というのに目に留まったのだろうか、ヴァイオリンのコレクターであるという人が僕をホストしてくれることが出発2週間くらい前に決まった。どのような生活が送れるのだろう、と待ちわびているうちに出発の日がやってきた。たったの一年と割り切っていたからだろうか、一年も日本を、SISを離れる、という感傷に浸ることは全く無かった。友人とのお別れ会でのボウリングの結果の無残さを時折思い返しながら日本を発った。

最初にむこうのお父さんにあった日のことは、今でも鮮明におぼえている。年は54でいかにもやさしそうなお父さんという感じで、会うなり温かく抱擁してくれた。車の後ろに”つれてきていた”ヴァイオリンを積もうとすると、そこにはもうすでにヴァイオリンケースが置かれていた。さすが、と思いつつ、車に乗り込むとお父さんは「見せたいものがあるから」と、小さな町に連れて行ってくれた。いかにもヨーロッパ、というような愛らしくて、こじんまりとしたところである。どうしてこうも建物がみんな可愛いんだろうかと思いつつ歩いていると、ヴァイオリンやラッパの音が聞こえてくる。どうしたことか、と歩を進めると、民族衣装をまとった人々が爽やかな空の下、楽しそうに音楽を奏でていた。お父さんいわく、これはオーストリアの民俗音楽のお祭りだそうで、全国のヴァイオリン愛好家などがあつまると言うのである。では一緒に弾きましょと言うので、見るとお父さんはすでに自分のヴァイオリンを手に入っていた。僕もあわててヴァイオリンを用意して参加させていただいた。無論、どれも聴いたことの無い音楽ばかりだが、つむき出される旋律にあうハーモニーを探しながら伴奏部をひいていた。音を楽しむ、だから音楽。よく聞くフレーズではあるが、これを本当に理解できたのは、このときが初めてではなかっただろうか。日本より空



気が乾燥しているからだろうか、ヴァイオリンが良くなってくれることもうれしかった。まだドイツ語を話すこともままならなかったものの、たくさんの人にやさしく接してもらえ、音楽は言語をこえるということを実感した。2時間くらい楽しんだあと、参加賞のヴァイオリンバッジをもらい、お父さんと町を離れた。これがなんとも贅沢な初のオーストリア体験である。

家に着くと、お母さんとおばあさん、犬二匹が出迎えてくれた。家はオーストリア南東部のシュタイアーマルク州の、人口2500人ほどのイルツという町に属する小さな村、ノイドルフにある。無論、祖父のしゃれのレパートリーに「タンタンはどこにイルツ？」というのが新たに加わったのを知ったのは帰国後のことだ。一度訪れた方にはわかってもらえるとおもうが、オーストリアを含めヨーロッパの田舎町は、大概雰囲気がよく、小奇麗で、心地のよさを感じる。その空気にそぐわない建物、家屋がめったに見当たらない。種々の建物が乱立する日本とは大きく違っている。僕の住まわせていただいた家も然りで、それ一つとっても、住んでみたいと思わせる家なのだが、その上にまわりの景観にうまく溶け込んでいる。このような光景を目にしながら、犬の散歩することができたのも貴重な経験だった。家には芝生に覆われた広大な庭があり、そこにおいてあるブランコ型のソファに、揺られながら座るのは、格別である。オーストリア人はGemütlichkeit（居心地のよさ）というのを大事にするのだとお母さんからおしえてもらったが、それが日々の生活の中でもよくわかる。しかし、何よりも僕を驚かせたものは、セミナールームである。そこにはガラス張りのショーケースの中に、何十台ものヴァイオリンが飾られてあったのだ。様々な装飾が施され、形が変わったもの、弦が八本あるもの、その上金属製のヴァイオリンまで……。目が点にならざるを得なかった。僕の表情をみるお父さんは至極ご満悦そうである。オーストリアでの生活の始まりはこんなところである。

問題は、新たな学校での生活に馴染めるかである。正確に言えば、周りの地元の子が、年の違う異邦人（都合上ひとつ年下のクラスに入った）を受け入れてくれるか、であるが、そんな悩みはひょんなことから消え去った。それはトランプである。オーストリアでは6から10までの数字と、A,J,Q,Kの絵札で鈴、どんぶり、葉っぱ、ハートというスートとからなる独特なイラストのものが主流である。同級生らは、休み時間には（十分休憩もふくめ）必ずといっていいほどそれを使って遊んでいた。そんなカードを使うため、いま

までしたことのないようなゲームを遊んでいた。興味深く思い、思い切って遊び方を訊ねてみると、彼らは快く、平易なドイツ語で説明してくれた。一緒になって何度かプレーするうちにだんだんわかってきた。こいつはおもしろい、と思うようになったころには、もうみんなと親しくなっていた。こうして僕も毎休み時間さんかすることになった。

次なる問題は授業だ。ふつうの地元の学校に言っていたので、授業はもちろんドイツ語で行われる。数学は難なくこなせたものの(驚いたことに試験に公式集を持ち込み可)、物理は苦手。英語も、先生がドイツ語と英語を交えながら話すので、頭がこんがらがり、またせっかくオーストリアに来たのにここでも英語なんて、などとんでもないことを考えてしまったために、やる気が出ず、帰ってきてから痛い目にあった、というより今もあい続けている。生物、地学では先生が口で説明するのをノートに写さねばならなかった。無論、最初のうちはなんのこっちゃである。その上口頭試問が数回課せられるため、友達のノートをかりて、その線文字のような筆記体を、かのヴェントリス(山川出版《世界史B用語集》を参照されたし)のごとく解説しながら、植物の茎がどうのとか、大気圏ではどうだとかを必死に覚えた。しかし、一番困ったのはスペイン語だ。なにせ、単語帳を渡されても、訳のドイツ語すらわからない。況やスペイン語をや。というわけで二週間も経たないうちうちに、スペイン語の授業を下の学年のドイツ語に変えてもらった。

そんなこんなで授業が終わり、バス停へ向かう。なんとこのとき、12:30あるいは13:30である。よって昼食は家でとる。しかし、ここでも難題に突き当たる。どのバスにのるかだ。行きのバスの種類は、田舎のバス停なので一種類しかないが、帰りのバスではそうはいかない。困ったことに、バスの行き先が書いていないことがある。このことをしらないで、数時間まったことがあった。知人がバス停で呆然としている僕を見つけて、助けてくれ、この事実気づかせてくれた。その日から来る日も来る日も「イルツまでいきますか」とバスの運転手に確認しなければならなかった(そんなことをしていたのは僕だけではなかったのも、そんなものなのだろう)。

昼ごはんを家で食べたあとは、のんびりとヴァイオリンを弾く。三時ごろになると、おばあさんのもとにコンパニオン(おしゃべりの相手をする人)がやってきて、一緒にコーヒーを池のそばのテラスで飲む。僕も一緒にさせていただき、世間話に耳を傾けたり、おばあさんに読み聞かせをしてあげたり(おばあさんはもう視力がほとんどない)した。これはいいドイツ語の勉強になったと思う。なにせよ、こののんびりとした時間は、日本では味わえない優雅なものであった。月曜と木曜には町のアマチュアオーケストラに参加させていただいたり、お父さんとお母さんと一緒に合奏したり、オーストリアでの生活は非常に充実していた。

こんな日常が過ぎていくうちに、だんだんとドイツ語がわかるようになってきた。一応出発前に授業をとったり、準備はしていたが、ご近所さんや友達との会話では通用しないことが多々あった。原因は、なまりである。そのことをはじめて意識したのは、学校の授業で、友達が「Oachkatzlschwoafて知ってる?」と聞いてきた時だろう。はてなという表情を顔にうかべていると、Eichhornchenschwanz(こりすのしっぽ)がなまったもので、シュタイルリッシュというこの地方の方言の典型的なものだそう。確かにドイツ語の口語で多々使用されるIch habe イッヒ ハーベ(I have)がi hob イ ホブ という風になまっているというのはうすうす感じていた。そこで、この方言をみんなから教えてもらうことになった。も



ちろんここにすべてを紹介するわけにはいかないが、ひとつ大事なフレーズをあげるとするならばSchau ma mal! シャウママルである。これは英語に直訳するとLet's see! である。こんな英語が使われるかどうかよく知らないが、このフレーズ、オーストリアでは非常によく耳にする。大体は「まあ様子を見ようじゃないか」、というような意味だろうが、「きっとなんとかなるさ」という楽天的な雰囲気を感じていて、まことオーストリアらしい。僕の留学の一年もこの一言でまとめることができるかもしれない、とはいいいすぎか。こうして方言を習得していくうちに、気づけば自分のドイツ語もなまってきたが、よりみんなと会話するのが楽しく感じられた。

留学中、オーストリアを出ることはなかったものの、国内観光をすることはあった。なかでもウィーンはやはり忘れられない。国立歌劇場で極上のオペラを鑑賞し、段差の低い階段を足がもつれそうになりながらも、一段一段上っていった(それがマナーだそう)のも克明に覚えている。それでも印象的だったのは、CD屋での出来事だ。家の近所の田舎町には当然大きなCD屋なんてないので、久々にウィーンでクラシックのCDを物色していると、刺青を腕に入れたテンション高めのおじさんが英語で話しかけてきた。どうやらそこの常連らしい。日本からの留学生でドイツ語を多少話せる旨を伝えると一人感激していた。その人のおじさんが日本人とともに戦ったそうで、「日本人は強かった」とよく語っていたそう。またそのタトゥーを入れたおじさんはしきりにブラームスを薦めてきた。かれが「ブラームスはいいよ!」という光景はシュールそのものであったが、せっかく薦められたので僕は手に取っていたモーツァルトのCDを戻し、ブラームスの交響曲全集を買うことに決めた。今でもそれは僕の愛聴盤となっている。

こうして、振り返ってみると本当にいろいろなことを経験したものだ。冬は雪が降り積もり、一面銀世界、という環境で暮らしたこと無かったし、無論見ず知らずの子供に投げつけられた雪を、バス停でお姉さんにはらってもらったこともなかった(その帰りのバスの中でするんるん気分モーツァルトを聴いていたのはいうまでもない)。そのような寒い冬を越えた後にやってくる、春の美しさはなんといいきれないだろう。小鳥のさえずりが響き渡り、からすもなまけた声をだしている。シューマンの歌曲にIm wunderschönen Monat Mai 美しき五月に というのがあるが、それをまさに肌で感じることができた。ほかにもいろいろあって、ここには到底書ききれないが、こんな経験ができて自分は本当に幸せだと心から言える。たくさんのかたがたに親切にしてもらい、感謝しても仕切れない。また、このように留学することができたのも、SISという環境のおかげであり、サポートしてくださった皆さんに感謝の意を示し、この文章を終わりたいと思う。みなさん、ほんとうにありがとうございました。

SIS 「吹夢(スイム)キャンプ」に参加して

放射能被曝の不安を持つ親子に向けての保養プログラム

高田恵実、神保さほり

SIS12年



8月10日から14日までの5日間、私達は吹田市自然交流体験センターで「福島の子どもたちを放射能から守ろう・関西」主催の「吹夢(スイム)キャンプ」でボランティア活動をした。キャンプの参加者は東日本大震災で被災した子ども達や家族であり、少しの間でも放射能被曝から逃れて、保養を受けるのを目的としてこのキャンプに参加していた。チェルノブイリ近辺では避難ができなかった人たちの為にこのようなキャンプをたくさん開催しており、学校のカリキュラムにまで保養キャンプが組まれている。体内のセシウムを大いに減らすことができる、ということでも重視されている。

関西では東日本の話を耳にする機会が段々減ってきているように感じるが、今でも放射能被曝の問題は続いている。東日本の汚染地帯では線量が安全基準値を大きく上回る箇所は街中でも数えきれないほどあり、人々はこの見えない放射能と共に生活しているのだ。日常生活で触れたり、体に取り込む食材、水、空気はすべて汚染されているのだ。

私達はボランティア活動に向け、このような東日本の現状についての事前学習を行った。『内部被ばくを生き抜く』という映画を観たり、『福島の子どもたちからの手紙』という本を読んだり、学内でのミーティングを行って意見交換をしたりした。この事前学習の中でも大きな話題になったのが、汚染地域に住んでいる人々の放射能への恐怖やストレスだった。「被曝でやられる前に、精神でやられるかもしれない。」という映画に出てきた一言はとても印象的だった。このような事前学習をし、私達は保養キャンプの本当の意味に気付かされた。身体はもちろんのこと、心もリフレッシュできるようにしてあげたい、という気持ちが私達の中で沸いた。

事前学習をし、東日本の深刻な状態に気付かされた私達は、複雑な気持ちで初日を迎えた。午前中はプールに入り、午後は皆で集まって色々なアクティビティをした。毎日のご飯も健康面をとても考えられたものであった。普段と違って、子ども達の健康状態や心の状態を特に気にしていたが、子ども達は相変わらず元気で素朴でとてもかわいかった。遊んでいる時には福島の子どもであることを忘れるほどだったので、浮き輪などを見て、福島の住所がパッと目に入った時などには、急に現実に戻された気分だった。活動が終わり、家へ帰る際には、色んなことを考えた。特に

印象に残っているのは、初日の夜だった。その日には皆で石ころに動物の絵を書き、子ども達は笑顔だった。良く考えてみると、この子ども達は気軽に落ち葉拾いや石ころ拾いをすることができない。どこが汚染されていないのか、どの程度の汚染かを遊ぶ前に確認しなければならないからだ。皆楽しそうにしていたその夜には、このような福島の現状が隠れていた。

このキャンプに参加し、福島の子ども達と実際に触れたり、東日本の汚染地域の現状について考えたりする機会になった。チェルノブイリの事故では、重症患者の入院数が急に増え始めたのは事故から数年経った後だった。東日本でも同じことが予想される。今回吹田市のキャンプに参加した人はたったの20人程度だったが、よりたくさんの人に保養キャンプに来てもらい、少しでも病気になるリスクやストレスを減らしてほしい。東日本の問題は決して終わったわけではないので、今後も東日本の人達を何らかの形で支援したいと考えている。

最後に、私が体験した忘れることのできないエピソードをここに書いておきたい。それは、一人の女の子とプールで遊んでいた時のことだった。会話中、この子は急に聞いてきた。「原発を止めて欲しいとサンタさんに願ったらその夢は叶うかなあ。」と。福島の子ども達は原発や放射能と共に生きていることに気付かされた瞬間だった。

桂木先生、モモの家の方々、野島先生、このような機会を与えて頂き本当にありがとうございました。

(ボランティア参加者:堀早来、谷村凱也、岡村一輝、和田尚也、宮本麟太郎、下明日香、清弘はるか、鰐淵寛子、廣澤沙紀、里脇美瑛、神保さほり、高田恵実)



SIS 卒業生、教育実習で奮闘

3週間の実習を終えて

吉田 弦

東京藝術大学音楽学部器楽科チェロ専攻

今回9月18日から10月5日まで母校である、SOISで教育実習をさせて頂きました。この3週間、本当に素晴らしい経験をさせて頂きSOISの生徒、先生方には本当に感謝しています。

正直な話をすると、教職の授業を取っていますが先生になる気はありませんでした。ただ、今回教育実習をして、先生になってみたいと思い始めました。

大学で友人達が春に教育実習を終えて戻ってきてから話を聞くと皆、口を揃えて「辛かった・・・」「全然楽しくなかった・・・」とネガティブな発言ばかりでした。それもあってかなり不安な気持ちになりながら、しかし母校であるあのSOISならそんな事は無いんじゃないか、とも思っていました。

そこでふと、僕がSOISの生徒だった頃を思い出したのです。「あの頃にも教育実習生が来てたけど、すごく楽しそうだったし僕達もすごく仲良くなったな・・・やっぱりSOISなら大丈夫なはずだ！」

予想は的中。初日からホームルームはどんちゃん騒ぎ、一人でランチを食べていると沢山の生徒達に囲まれる。生徒側としてSOISに通っていたからこそある不安「もし生徒達に受け入れられなかったら・・・」そんな事を気にした自分がアホらしくなる程生徒達も、先生達もとても暖かく迎え入れてくれました。

ただ、こんな実習でも辛かった事がいくつかあります。SOISだからこそ音楽の授業内容自体は専門である弦楽合奏(Strings)。しかし、実は僕は指揮を振ったことが無かったのです。一応大学の授業で3日間、指揮法の集中講義がありましたが、それだけです。やはり1週間程練習しても失敗するわ失敗するわ・・・本当に授業では皆に迷惑をかけてしまいました。しかし、この3週間で少しはまともに振れるようになったと思っています。

そして更に、これもSOISだからこそですが、英語での授業。6年間SOISに通ってたのにお前は何をしてたんだ！と言われてしまいうえですが、大学にいた3年半の間に英語を使う機会がほぼ無く、ましてや元々SOISに入るまでは英語に縁の無かった人間、やはり使わないと忘れてしまうものです。これは結構ショックでした。ここまで喋れなくなるものか！と。聞いて理解する方は大丈夫なのですが、自分からの発言が出てこない。授業中も自分が言いたいことが2割程度しか伝えられない。これは本当に辛かったです。しかし、そんな時でもSOISの生徒達はこちらが伝えようとしていることを必死に理解してくれようとしています。これが本当に嬉しくて、嬉しくて・・・あの真剣で興味津々な眼差しを見て、もっとこの子達に色々伝えたい！と思い、先生になればもっと伝えられるんじゃないか！と思うようになったのです。

今回自分が通っていた学校、最早僕にとっては家のようなSOISで教育実習をした事によって、先生達の大変さというのすごく分かりました。僕が生徒だった頃、先生方にどれだけのご迷惑をお掛けしていたか、どれだけ時間を使って下さっていたか・・・今回は時間が無く、出来なかったのですが、一度それぞれお世話に



なった先生方に挨拶に行かなきゃならないな、と思います。

3週間という短い期間、凄く充実していてあっという間に過ぎてしまいました。本当に3週間いたっけ？という気持ちです。あと2~3ヶ月・・・いや、ずっといたい！と思っています。実習を終えて東京へ出発する時、寂しさのあまり少し涙が出そうになりました。そこで「ああ、3週間という短い時間だったけど、僕は生徒達の事をこんなに好きになっていったんだ・・・」と実感しました。

本当にありがとうございます！先生方、お世話になりました。特にMr.Villapandoと水口先生、本当にありがとうございました！

生徒の皆、今度は卒業生として、SOISに絶対に遊びに行くからな！

教育実習を終えて

金江 蓉乃

法政大学キャリアデザイン学部キャリアデザイン学科

はじめに、お忙しい中教育実習生として受け入れていただき本当にありがとうございました。特に中村先生をはじめ社会科の先生方には日々たくさんのアドバイスをいただき、先生方の授業を見せていただく中でたくさんのお話を学びました。たくさんの先生方・生徒のみんなに支えられてあっという間に3週間は過ぎてしまいました。SISのみんなの学びに対する姿勢や貪欲さ、を見て、気付かされたことがたくさんありました。私のほうがみんなから学ぶことが多かったし、忘れていたものを思い出させられたような気がします。日々自分の力の無さ、知識のなさにも悩まされましたが、私も負けてはいられない！と一生懸命取り組みました。やればやるほど、SISの先生方がされている授業は質が高く、どれだけ難しいのかということを感じましたが、これから経験を積みながら先生方の充実した学びを目標にして頑張っていきたいと思っています。

この3週間、SISに生徒としてではなく教師として同じ場所にたってみると全く違う景色が見えました。しかしこの学校の生徒は、本当に皆目が輝いていて遊びも学びも楽しんで精一杯に生きているのは今も昔も変わりません。私も授業を見に行き行って学んだり、再び不思議ウィークやスポーツデーを体験できたりしたことは本当に嬉しかったです。皆それぞれこれからたくさんの方がいると思います。SISにいるからには本当に全部、思い切り楽しんでやらないと損ですよ！勉強も遊びも何事にも一生懸命取り組んでほしいと思います。私はSISを卒業してから後悔したことや、気がつかされたことがたくさんありました。限られた時間の中でどれだけ充実した生活を送ることができるかは、皆さん次第です。やるかやらないか、その一歩が、いつのまにか気がつけば大きな距離になっています。日々当たり前のことを、当たり前と思わずに一生懸命何事にも取り組んでたくさんのお話をSISで得てほしいと思います。卒業してしまえば当たり前のことが、当たり前でなくなります。1日1日を大切に、是非思い切りSISでしかできない青春をしてください。私は生徒だった頃にもSISのことは大好きでしたが、卒業して、さらに今回実習で訪れてもっともっと好きになりました。SISの生徒であったことをこれからも誇りに思い、将来へ向けて励みたいと思います。本当に、3週間どうもありがとうございました。



SIS 大阪大学高大連携プログラム

水口 香

教務センター、英語科

本年度は、大阪大学の72講座が高校生を受け入れ、SISから14名の生徒が参加しました。新しい切り口から個人の知識を深めるとともに、新たな学習対象を得ることができたようです。また、大学生のもつしっかりとした基礎知識と思考力には学ぶところがたくさんあったようです。受講生は、最後に眞砂校長と面接試験を行い、1単位を与えられます。

来年度の募集は冬学期に行います。興味がある方は相談にきてください。

[2012年度SIS生が受講した大阪大学の講座]

「子どもの現在」、「社会科学の名著を読む」、「戦後日本経済を考える」、「多文化コミュニケーション」、「ファシズムとは何か」、「エレクトロニクス最前線」、「社会と情報通信」、「出産を考える」、「臓器移植の諸相」、「ビブリオバトル入門」

[受講者のレポート]

「出産を考える」 11年3組 逢坂亜美

私は夏休みの3日間、大阪大学医学部の「出産を考える」という授業に参加させて頂きました。この授業では、少人数のグループに別れて2日間、出産や子育てについてテーマを決めてリサーチをし、最終日にそれを発表しました。同じグループになった阪大生の方々とたくさんディスカッションをしました。オープンキャンパスでは分からない、大学のお話も聞くことができました。3日間で大学生の方々と親しくなれて良かったです。

「エレクトロニクス最前線」11年1組3番 五井春香

エレクトロニクスは、現代社会には必要不可欠な技術であり、スペースシャトルやスーパーコンピュータから携帯電話まで、ありとあらゆるものに使われている。この講座では三日目かけて、エレクトロニクスはどういうものか、具体的にどのような所に使われているかを学び、実験や講義を通してその面白さを体験した。

1日目は主に半導体や集積回路について学んだ。半導体は、金属のように電気をよく通すのではなく、半分だけ電気を通す性質をもった物質をもち、電気の流し方をコントロールできるため、電子回路の基板に使われている。また集積回路は、トランジスタという電気の流れをコントロールする部品をたくさん集めてできたもので、パソコンのCPUなどに使われている。講義ではトランジスタの歴史や、ICカードなどに入っているICチップなどがいかにかに小さいかなどを教えていただいた。

2日目は半導体レーザーと液晶、LEDなどについて学んだ。エネルギーを光に変換する(逆もあり)ことができる半導体を利用した半導体レーザーがどのような仕組みになっているかを教わった。液晶やLEDなどの話では実際に液晶を作って液晶の性質を確認しながら講義を聞いた。

3日目は有機ELとカーボンナノチューブなどの有機材料などについて学んだ。内容は有機ELがどのような仕組みで光るのか、液晶ディスプレイと有機ELディスプレイの違いなどである。カーボンナノチューブは炭素でできたグラファイトの薄いシートを筒状に巻いたもので、巻き方一つで金属のようによく電気を通すこともできれば半導体のように一部のみ電気を通すこともできる。この日はカーボンナノチューブを使った、火災探知機などに欠かせないガスセンサを作る研究室を見学し、一部の器具に触らせていただいた。

3日間を通して思ったことは、こんなに身近な技術なのに知らないことばかりだったということである。また液晶の実験もかなり印象的だった。また教授や他の大学生とも話すことができ、かなり貴重な体験をさせていただいたと思う。

この講義を受ける人は、予めエレクトロニクスについて少し予習をしておいた方が話をより深く理解できると思う。また、大学生と交流できるまたとないチャンスなので積極的にコミュニケーションをとることを勧める。

JAL機内誌でリサーチスキルの授業紹介

JAL国際線・国内線機内誌「skyward」8月号で、社会科のリサーチスキルの授業が紹介されました。

(関西学院ウェブページより)

JAL機内誌内の紙面講座に千里国際高等部ダッタ教諭が登場

関西学院は、JAL機内誌に「関西学院大学スカイセミナー」と銘打った1頁広告を出稿し、関西学院の教員の研究内容などをわかりやすく紹介する誌面講義を展開しています。8月は関西学院千里国際高等部のダッタ・シヤミ教諭が「高校生が『Why & Effect』を考えることで生まれるゼミ授業」と題して、千里国際高等部で実施している世界のどこの高校・大学・職場でも通用するリサーチ・プレゼンテーションスキルを身につける取り組みを紹介しています。本誌面講座は下記URLからご覧頂くことができます。

<http://www.kwansei.ac.jp/skyseminar/pdf/sky92.pdf>



「軍隊のない国」への訪問

野島大輔
SIS社会科

地上の楽園。あらゆる暴力のない理想の場所を、人類はなぜか延々と探し求めて来ました。トマス・モアの名作『ユートピア』の原義が「どこにもない国」であるとおり、しかし理想郷とはなかなか見つからないものです。

日本国憲法第9条。第1項で「戦争の放棄」を、第2項では「軍備の放棄」を謳っている条文で、改憲論者「理想かもしれないけれど実際には無理だ」・護憲論者「いや何とかその境地に辿り着かねば」などと数限りなく議論されてきた条文です。憲法学者の大多数が、世界第5～6位の実力ともいわれる現状の日本の軍備を合憲とは見ていないように、日本国は残念ながら、少なくとも第2項についてはしっかりと守れては来ませんでした。本稿執筆現在、尖閣諸島または釣魚島の領有を巡る日・中(中・日)の対立やそれにまつわる事件が毎日のように報じられており、中には軍拡を煽る言論も双方から聞かれます。

平和学者の調査によると、「軍備の放棄」を絵空事とせず、実際に常備軍を持たないか、自国の軍備に強い制限を課しているという国家が、地球上に約30ヶ国存在しています。世界に約200ある主権国家のうち、およそ15%の国家が、実際に軍備を放棄する政策を取っている、という訳です。

中でもアイスランド、サモア、コスタリカ、などがよく知られたところで、その実態は様々ですが、とりわけインド洋の西側に連なる諸国は、多角的な平和外交政策を背景にした非武装の政策を追求して来ました。小生が今夏訪れた、モーリシャス共和国はそのひとつです。

空港から首都のポートルイスに通じる道から見る風景は、たくましく尖った山々がシャープに刻み込む青空の淵まで、どこまでもサトウキビ畑。今もってモノカルチャー(単一作物栽培)を強いている、植民地時代の遺構といえます。そんな単調な車窓を眺めつつ、タクシー運転手のおっちゃんにモーリシャスの特色について聞くと、待ってましたとばかりに「モーリシャスには軍隊がない。だから兵役もない。」とのお答え。「なぜないのか？」と聞くと、「モーリシャスは、世界に敵がいらない。だから戦わない。だから軍隊はない。(No Enemy, No Fight, No Military)」との単純明快な説明。



＜モーリシャスの豊かな自然・海と山＞



＜元サトウキビ工場の歴史博物館＞ ＜大陸出身のコンシェルジュ氏は若くて語学堪能＞ ＜リゾート風クレオール・メニュー＞

植民地時代の爪痕、特に奴隷貿易や伝染病の蔓延という悲惨な歴史を持つアフリカ圏にあって、大陸にある諸国と同様、この国家もかつては暗い過去を持っていたことは、サトウキビ工場を改装して作られた博物館に長々と展示されているとおりです。かつてはもちろん、大国の絡んだ大きな争いもありました。しかし現在は、大別して8つと言われる宗教が同じ町並みに共存し、少数の宗教集団にも国会で最低1議席を与えるなどの非常に意欲的な民主主義のための仕組みが採択されています。小学校から2言語(英語・フランス語)の教育が行われ、クレオール言語やそれぞれの宗教で用いられる言語と併せて、一人の国民が平均4つの言語を話すそうです。肌の色が互いに異なる人たちがごく普通に共に働き、食事はご当地の食材を活かしつつ、アフリカ圏・中東圏・アジア圏の料理が融合してできた、クレオール食。街角で、お皿の上で、様々な文化が、実に仲良く溶け合っています。



＜ヒन्दウ寺院、キリスト教会、イスラム教モスクなどが同じ町の中に立ち並ぶ＞

経済的には、世界大で見るとモーリシャスの一人当たりのGDPは真ん中より下位ですが、アフリカ圏内ではトップクラス。路上でたまにホームレスや物乞いの人々を見かけることもあります。普通に働くことができれば、家に住み車を所有できるという感じの経済状態でした。2008～09年の世界的な金融危機にあっても経済成長率はプラス。金融のグローバリゼーションにあまりのめり込んでいないためにかえって助かった、とのこと。サトウキビ栽培・輸出のモノカルチャー経済からの脱却のため、「勤勉」が自慢という国民性を活かした、若者ファッションを中心にしたアパレル産業や、海産物の加工・輸出の産業にも手が着き始めています。観光業も盛んで、ライオンと一緒に散歩ができるツアーでヨーロッパからの観光客に大人気の「ナチュラル・パーク」に見られるように、自然保護のための政策も行き届いています。野生のイルカと泳ぐツアー（といっても朝食のため湾内に集まるイルカの群れの近くにボートから落とされるだけです）も人気の的です。この背景には、幻の鳥・ドウドウをかつて絶滅させてしまった反省がありましよう。



＜「ライオンに触れよう」「野生のイルカと泳ごう」各ツアー＞ ＜絶滅させられたドウドウの復元模型が無料の国立博物館内に＞

エネルギー政策の面では、地球温暖化への配慮のため、石炭火力への依存から、サトウキビの搾りかす（産業廃棄物？）を使ったバイオ発電への割合を高めているところとか。大量生産・大量消費・大量廃棄タイプの経済の時代をあまり経験しないで、再生可能エネルギーの活用の道に直接向かうため、エネルギー転換にかかるコストの面では、先進諸国よりもむしろ効率がよさそうです。

在留邦人が極めて少なく、交流が乏しいためか、入国の際にパスポートを見せると「日本ってどこなの？」とろたえたのは、税関の女性職員。仲間の職員たちに聞いてもなかなか解らない様子でした。ホテルでは私たち夫婦のチェックインの書類に「CHINESE」とプリントしてあったので、「あの、ちがうんですけど…」と申し出ると、次に出てきた訂正版はなんと「CHINESE=JAPANESE」との表示（かつての香港のようなところだと思ったのでしょうか）。彼らにセンカク問題を理解してもらうのには、かなり苦労しそうです。もっともこれは「地理的に遠いから」という理由だけではなく、努力の末「世界のどこにも敵がない」社会を築いてきた人々にとって、残念ながら多くの「敵」を作ってしまった外交政策を採ってきた国家との、考え方の面での縁遠さという側面についても、じゅうぶんに考えておかなくてはならないところでしょう。



＜どこでも&どこまでも続くサトウキビの道＞

これは教育の責任ですが、モーリシャスの税関官吏が日本を知らないように、日本で暮らす人々はモーリシャスの平和な社会の建設方法について、あまり知識や関心を持っていません。戦争に反対する教育だけでなく、実際に平和を創るための教育が、今、世界中で求められています。冷戦期どころか世界大戦期からさほど基本構造に変化のない、地球上にほぼ唯一といえる「国際機関・国際取極めの真空地帯」の北東アジアに、さらに軍備をつぎ込むという人々や、憲法論議に行き詰まり、今日の事件や紛争の報道の前に失望して、やはり軍備の放棄など絵に描いた餅…、と片付けてしまっていた人々には、ぜひ一度調べてみて頂きたい場所です。

OIS Graduation 2012

We would like to thank everyone for sharing the commencement ceremonies with our senior class. Besides immediate family and current faculty also attending on the evening were former members of the class, SIS graduates, extended family members, and family that had travelled from overseas. Thank you to all for making such significant journeys.

This ceremony has 2 main purposes. It is a celebration for these accomplished young men and women. It is also, importantly, a recognition of the many people, family, teachers and friends, who supported them to that point in their lives. Congratulations to all.



2012 SENIOR GRADUATION Friday 15 June



■ 学年だより Grade Reports

●OIS Grade 4

JOINT LITERACY PROJECT

Lora Vimont

OIS G4 teacher



Thinking. Storyboarding. Acting it out.

On Thursday, September 27th, Mr. Avery's High School Children's Literature Class came in to collaborate with Mrs. Vimont's Grade 4 class for the 2nd time this year. For this session, the SOIS students prepared a creative storyboarding activity for *The Wretched Stone*, a children's book written by children's author Chris Van Allsburg that 4th graders have been studying in class.

For this activity, the students worked together to sketch out their ideas of significant scenes from the book using a storyboard organizer. Then they quickly thought of ways to creatively act out these scenes through freeze-frame mini-dramas that they then performed to an audience of their peers and teachers.

This activity was very effective in helping all students better understand the characters in the story as the drama required them to show their feelings and actions in each scene "without words." Two more collaborative sessions are planned which involve the creation of children's books that will be written by Mr. Avery's students and peer reviewed by Grade 4 students.

●SIS Grade 7 中部部1年生

「変化」を楽しみましょう！！

間島圭司

SIS7年担任、理科

8月末、初めての中中学生での最初の夏休みを終えました。春はとてとてもとてもとても元気な7年生でした。「夏休みを終えて少しは落ち着いたかな…」と思いながら最初のHRに向かうと……ぎゃーぎゃー！！わーわー！！と叫びながら走り回る7年生。あいさつした後少しあきれながら「秋学期初めからめっちゃ元気やな～」と声をかけると、「だって夏休み長くて早く学校に来たかった～！」という声がたくさん聞こえてきました。初めての中学生活、色んな文化が入り混じるこの小さな社会でこの言葉が聞けたことは本当に嬉しかったです。春学期、とまどいながら入学

して、授業の際の教室移動に苦勞し、たくさんのレポートに苦勞し、友達関係に苦勞し…色んな苦勞を経験した分、「学校に来たい」と思える7年生達、少しずつ大人の階段を上っているんだなと感じました！

さて、そんな7年生に八木葵さんという新しい仲間が加わりました。この元気な7年生達はどうでしょうか？元気に押されたりしていませんか？でもあわてないで下さいね。まずは学校に慣れることです。ゆっくりゆっくり、そして徐々に個性を出して7年生達に溶け込んでいって欲しいです。今学期はHot Summer Contest、Sports Day、臨海実習…etc色んな行事がたくさんある中、7年生達はどんな「変化」を見せてくれるでしょうか？今からとても楽しみです。5リスペクトをしっかり守って、今学期もどんどん色んな事に積極的に挑戦してみましょう。楽しいことも、苦しい事も経験して、自分の「変化」を楽しんで！

●SIS Grade 8 中部部2年生

スポーツデイとハウスとそして遠足と山本靖子

SIS8年担任、英語科

ハウスシステムが始まった3年前から、スポーツデイは8年生にとってより特別な意味を持つようになりました。ハウスシステムとはなんぞやと思われる人に改めて簡単に説明させていただくと、SISとOISの6年生から8年生は、スポーツデイにおいては、高等部のように学年単位で競うのではなく、縦割りのミックスグループ(これをハウスと呼びます)4つに分かれて活動を行い、当日の競技にも参加します。特徴的なのは、各ハウスのリーダーを生徒会役員を中心に両校の8年生が務めるということです。これは3学年をまとめ上げる機会であり、学年単位で行動するよりも強いリーダーシップを求められるということです。

ハウス活動は当日だけでなく、LHR活動にも及びます。9月に各ハウスに分けられると、その中で、応援グッズ、応援団、パフォーマンス、玄関の柱装飾の4つのグループに分かれ、毎年9月と10月のスポーツデイまでのLHRをこの活動に充てます。今年は9月のLHRが思ったように使えず、中々厳しいスケジュールでの準備となりました。今回は、スポーツデイ全体のテーマが「動物」ということもあり、それぞれハウスカラーにちなんで、



House 1は青で、ハウス名を「Sharks」、House 2は緑にちなんで、「Ninja Turtles」、House 3は赤で、「Red Dragon」、House 4は紫で、「Barney & Friends」と決め、それぞれポスター制作(これはスポーツデイで得点になります。)、玄関柱のデコレーション、パフォーマンスの練習、あれやこれやをLHRだけでなく、勉強やクラブ(これも今年は8年生が中心です。)やその他の活動の合間を縫って行い、本当に出来上がるのだろうかと思わせるような時期もあったり、それぞれがあまりに熱心に取り組んだ結果としての心のすれ違いも経験したりしましたが、さすが8年生、そんなこんなを乗り越え、底力を発揮し、素晴らしい成果を残してくれました。スポーツデイの前日、生徒全員が下校した後、改めて玄関柱の装飾(一見の価値ありです)とポスターを眺めた時、そのクオリティの高さに本当に驚き、感動しました。そして当日の各ハウスのパフォーマンス、これも他の学年の先生方から、「毎年クオリティが上がっているね。」というお言葉を頂きました。スポーツデイという性質上、順位はついてしまいましたが、私は、そのRespect for leadership、努力に対して、すべてのハウスに1位をあげたい、そう思わせる今回のスポーツデイでした。

ハウスの話に戻ると、インターナショナルスクールで良く導入されているこのシステム、ハリーポッターよろしく、本来は入学する時に、あるハウスに入るとその後卒業するまで、様々な活動をそのハウスで行うものです。そしてその中で、上級生はリーダーシップを身につけていきます。そのこともあり、本校でもスポーツデイに限らず、年間を通して、そして学年をまたいで、ハウスで色々なことをやっていけたらという話がハウス活動を始めた3年前から出ています。今回の8年生の頑張りは、その計画が実現可能であることを証明してくれるような内容で、前にも増し、一層8年生が頼もしく思えた行事でもありました。今回培った力が、8年生として初年度となる11月7日の遠足の企画でもいかに発揮されることが、今から楽しみです。

●SIS Grade 9 中等部3年生

Claire Udy

SISG9 homeroom teacher, English

As the weather cools down around us we look forward to the events of fall trimester. A theme for this trimester in grade 9 is COOPERATION. This trimester grade nine students will be participating in two major events that will require them to unite and work together to ensure both their success and their full enjoyment. Cooperation is always an integral part of school life but none so more than this trimester.



This year's sports day was the first time for us to compete as an entire grade. The students really worked hard to ensure that their debut grade dance performance left a lasting impression. Thanks very much to Nana and Masora and their team of busy helpers for organizing such a large group of students effectively. The dance was full of energy and creativity. Students also practiced and prepared well for both individual and team activities. It was tough to compete against the higher grades, being the minnows of the high school competition, but our big hearts and determination to do our best kept us going right to the end. I am really pleased with grade nine's unity, spirit and enthusiasm during the day, well done!

Our next event is the eagerly anticipated grade trip. This year the grade decided to go to Mie prefecture. We will be going by bus from school to Toba city and will spend the first day

Dear 尾木ママ

井藤眞由美

SIS教頭

尾木ママこと、尾木直樹先生、先日は本校卒業生で現在は法政大学で先生のゼミ生である金江蓉乃さんの教育実習生としての研究授業のために、遠く東京からお越しいただき、さらに私たちとの会談の時間まで作っていただきありがとうございました。実際にお会いして、テレビや書籍で拝見する先生そのままの優しいお人柄と教育観に触れることができ、貴重な情報交換もさせていただき、感謝しています。授業を見学していただいたクラスの生徒たちも大喜びでした。

SISのことを説明させていただいた時には、何度も「日本の学校がみんなこんな風になるべきなのよ」と言ってくださいました。特に、学期完結で高校生が自分で時間割を組み立てる仕組みと、万国旗を飾っている入学式の写真は、東京に持ち帰ってみんなに見せると言ってくださって感激です。

ブログでこの日のことを書いてくださったのも拝見しました(<http://ameblo.jp/oginaoki/entry-11377645169.html>)。毎日過密なスケジュールで動いておられるのですね。先生は大学で300人くらいの学生を対象とした授業であっても、学生一人一人にとっても丁寧な指導をされるということを金江さんから聞きました。どうかお体に気をつけて、大学でも、そして日本の教育全体のためにもますますご活躍いただきたいと思います。これからも皆で応援しています。私たちも先生のように、日本の教育を変える力になれるよう頑張っていきます。

ぜひ次回はまた違う形でこのキャンパスに来ていただける日があることを願っています。



going around Ise Shrine, a place of great historical and cultural significance. The students have been put into groups and given the responsibility of planning their own schedule and activities. The students are encouraged to explore the area to gain a better understanding of what makes Ise Shrine so special. Students will also have the opportunity to do a little shopping and sightseeing in and around Oharai Machi and the Toba aquarium. The following day we will be setting our sights on the exciting amusement park Nagashima Spa Land. One of the rides, the Steel Dragon, is one of the worlds tallest and fastest. It is especially well known for its four action-packed minutes of g-forces, drops, and fear. As it still holds the world record as the longest thrill ride, the students will have an exhilarating time on this ride and they might even be able to persuade the teachers to have a go as well! I am looking forward to an enjoyable, safe and memorable school trip.

●SIS Grade 10 高等部1年生

Stephen Frater

SISG10 homeroom teacher, English

Grade 10 welcomed two new students to the school this trimester, Ibuki Kashiwagi in G10_2, and Haruka Ozone in G10_4. They are very welcome additions to the grade, and our thanks go to the other students for helping them to settle in so quickly.



On returning to school after the summer break, the students had to quickly start getting ready for Sports Day. They organised themselves into several committees with the OIS G10 students, and cooperated well to prepare a music/dance performance, a poster, T-shirts and teams for the events. The students seem to have learnt from their experiences in Grade 9 last year, and showed more initiative and awareness of what needed to be done, which is what we hope to see from students in high school. As a result G10 had a successful and very enjoyable Sports Day on October 13, performing a great dance routine, competing well in all the events, and recording some outstanding wins in the tug-of-war against teams from Grade 12 and Grade 11.

Our next goal is for Grade 10 students to begin thinking about university choices and career options. High school graduation may seem a long way in the future, however the students will shortly make course selection choices for the winter trimester, and in just over 3 months they will be selecting courses for their Grade 11 spring trimester. Students will therefore undertake some introductory research on a range of jobs over the next few months, in order to gain a better understanding of the benefits, skills, requirements and rewards of different career paths. We look forward to seeing and hearing the results of their research in the new year, when they can think about which

courses they want to take, and which courses they should take, during the last two years of high school.

●SIS Grade 11 高等部2年生

心にアンテナを

井上志音

SIS11年担任、国語科

長い夏休みも終わり、秋学期がスタートしました。授業や進路情報室で11年生の皆さんと話をしていると夏休みの体験談をたくさん聞かせてくれます。キャンプやグローバル塾の苦労話・長期留学の



思い出・つらかった夏期講習の体験談——大変なこともあったぶん、本当に皆さんにとって実り多き一夏だったのだなと感慨深く聞かせてもらいました。

担任として、特に昨年よりも成長したと思えることに「集団の中で自分はどのような人間であるか」を明確に意識し始める生徒が増えてきたという点が挙げられます。「上級生としてどうふるまうか」「自分とはどのような適性をもった人間か」「どのような将来ビジョンを持つか」。学校生活の様々な局面でこのような問いかけを自問自答することによって、一人ひとりが自分のアイデンティティを確立していくのだと思います。11年生がいま最も気に病んでいる(?)であろう大学進学の問題も、このプロセスの中で次第に整理され、形になっていくことでしょう。

これからの11年生に求められること、それは常にアンテナを張り巡らせて生活することだと思います。自己分析にしても大学進学にしても、それを考えるチャンスは日常のなかにいくらでも転がっているものです。「～は苦手だ」「～は興味ない」「受験があるから～だ」ではなく、視野を広く持って踏み込んだことのない世界に飛び込んでみてください。大学の学部選びもそうです。一つの領域にこだわりすぎず、まずは実際に自分の目と耳で広く体験してみることです。

10月27日には皆で上ヶ原キャンパスまで赴き、それぞれの学部の模擬授業を体験するプログラムがあります。関西学院を一つのモデルケースとして、大学の学びとはどのようなものか体験しましょう。このプログラムのなかに皆さんの大学・学部、そして将来の展望を見出すヒントが隠されているはずですよ。



彦坂のぼる

SIS11年担任、英語科

11年生秋学期の特別活動と言えば、やはりスポーツデイ、そして学年旅行の準備の本格化が挙げられます。今年度のスポーツデイは、お天気のみならず気温にも恵まれ、絶好の日和となりました。我々が11年生は、ドッジボール、綱引き、そしてスウェーデンリレーで1位を制しただけでなく、他の競技でもなかなかの健闘ぶりでした。結果は惜しくも2位でしたが、卒業する12年生が有終の美を飾ることができたという意味で、これも良かったのではないのでしょうか。(負け惜しみではなく!)活動への取り組みという意味では、今年度は昨年度以上に自律した活動が見られ、成長を感じる内容でした。一方で、こういった活動にはつきものである、どう

してもうまくいかない部分。そういったことから前に進む力を見ることができました。リードする側だけでなく、ついていく側としてもリーダーシップをリスペクトすることについて考えた生徒もいたようです。来年は今年の12年生のように、みんなで参加して1位を取って、晴れ晴れと最終学年のスポーツデイを終えることができると良いですね。

学年旅行の準備の方は、各クラス2～3名からなる旅行委員が毎週木曜日の放課後に集まり、活発な話し合いが持たれています。今年度の行き先は香港と決まりましたが、情勢を考えながら慎重に計画を進めるべく、委員たちは週の間に様々な調査をした上で木曜日の会議に臨んでいます。こちらはスポーツデイとは違い、初めての大規模な旅行計画に思考錯誤をしながらですが、今回の旅行を担当してくださることになったHISの森岡さんや教員と密にコンタクトを取りながら、学年の皆が楽しめる、そして学びになる企画を練っています。現在は11名から成るこの委員会、これから内容が深まっていくにつれて委員を少しずつ増やしていく予定で、3月までには旅行委員とそれを支える学年という全体のまとまりが形成されることを期待しています。みんなで楽しい旅行ができますように！

●SIS Grade 12 高等部3年生

Making Memories

Frances Namba

SISG12 homeroom teacher, English

There's such a lot going on in the grade 12 students' lives at the moment. Graduation seems to be just around the corner but there is so much to do before we get there. Many students' lives are revolving around application forms, recommendations and exam or interview preparations. Planning the next big step in life, while exciting, can also be a stressful and tiring time and we homeroom teachers would like you to know that we are here to help and support you in any way possible. Please be sure to keep a well-balanced, healthy lifestyle with plenty of sleep and relaxation periods in between the studying.

Other students have already secured their university place



The moment of victory!



Grade 12 parents: Always supporting us!

and can relax a little. However, our message to you is to make the most of the next few months. Don't just sit back and take it easy, but get the most out of your remaining time at SIS; take as many courses as you can, get involved with clubs and activities and give back to the school community. Make your last months at SIS a time that you can look back on fondly and create memories that will remain with you for the rest of your life!

In the midst of all this, we also had the final Sports Day to prepare for. What a wonderful day it was with all students working together to make this another day to remember. Thanks, too, to the parents who turned out in their yellow t-shirts and pom-poms to support us! With such support and determination it was no surprise that we achieved a resounding victory with a total score of 220 points. Not only did we excel in the sports activities, but we also won the Colour Spirit award, the Best Poster award and the Best Performance award! It was the last chance to enjoy an all-school event with the OIS 12th graders and the students in the lower grades and everyone definitely made the most of it!

Now that Sports Day is over, we will start to focus on the graduation ceremony and party. We teachers are looking forward to working closely with students and parents and to making this a fitting celebration of your years and achievements at SIS. You all have a lot to be proud of and a lot to be thankful for. The next few months will be a time to reflect on this and to make sure you finish your time with us on a high note. Good luck to you all!

学部選択説明会@KG上ヶ原キャンパス

井上志音

進路情報室、国語科

SIS11年生はこれからの大学進学を見据え、学部選択のためのプログラムとして、10月27日(土)の「学部選択説明会」に参加しました。これは関西学院大学を一つのモデル校として、全11年生に「大学の学び」を広く体感してもらうプログラムです。当日は関西学院の系列校を対象とした全体会のあと、各学部の模擬授業・クラブ見学・キャンパスツアーなどさまざまな催しが企画されていました。生徒はそれぞれ自分の興味・関心に沿って自由にプログラムを選択して参加することができます。こうしたプログラムを通じ、生徒一人ひとりが広い視野で自身の進路を考える一つの良い機会としてもらえればと考えています。



英検1級に1名合格

Rodney Ray

English

The following students have recently reported their results on the Society for Testing English Proficiency's (STEP) Test in Practical English Proficiency (Eiken). We had a lot of students passing the test at different levels this time, particularly a large group at P1 level. Special congratulations to SIS Gr11 Haruka Goi, who passed the Level 1 examination!



Good job everybody! Remember, if you take the Eiken, be sure to report your results to Iihara-san in the Business Office.

ENGLISH

SIS/OIS	Grade	Name	Level
SIS	11	Goi, Haruka	1級 (Grade 1)
SIS	11	Munemasa, Hiroki	準1級 (Grade P1)
SIS	12	Matsuyama, Shino	準1級 (Grade P1)
SIS	12	Hatanaka, Mari	準1級 (Grade P1)
SIS	12	Matsui, Tadataro	準1級 (Grade P1)
SIS	12	Ueda, Minami	準1級 (Grade P1)
SIS	08	Hirano, Kazuya	2級 (Grade 2)
SIS	09	Sasaki, Shota	2級 (Grade 2)
SIS	11	Yamamoto, Daichi	2級 (Grade 2)
SIS	12	Takasu, Maiko	2級 (Grade 2)
SIS	12	Hirosawa, Saki	2級 (Grade 2)
SIS	12	Kanemoto, Seijun	2級 (Grade 2)
SIS	12	Matsushita, Natsuko	2級 (Grade 2)
SIS	12	Miyaji, Risako	2級 (Grade 2)
SIS	12	Ikeda, Mana Caterina	2級 (Grade 2)
SIS	12	Tsujita, Masako	2級 (Grade 2)
OIS	04	Bobrove, Malka	2級 (Grade 2)
OIS	05	Holden, Zoe	2級 (Grade 2)
SIS	09	Hirano, Natsu	準2級 (Grade P2)

読んでみてください

長谷川夏子

保健室

先日、保護者会主催で行われた講演会『現代若者事情～我が子の生と性～』に参加させていただきました(準備して下さった保護者会の皆さん、ありがとうございました)。講演内容は非常に興味深く、私も勉強になりました。残念ながら、後半しか聞くことができなかったのですが、保護者の皆さんの驚かれた表情や熱心に聞いておられる様子がとても印象的でした。講演会の日に、講師の徳永先生が大量の参考文献を持って来て下さいました。うちの学校の図書館にも、そこにあった本がいくつか既に入っています。保護者の方だけでなく、生徒の皆さんに読んでもらいたい本たちです。

前回のインターカルチャに『服装について考えてみよう!』と題した内容の文章を書きました。皆さん、読んでくれましたか? 嬉しいことに「先生、前にインターカルチャで服装について書いてたよね」と、話をしてくれた人が居ました。それでも相変わらず、服装について私から注意を受ける人がたくさんいます。

露出度の高い服装で、私が注意をした人から返ってくる言葉は共通しています。「だって、だれも私の身体とか下着とか見たいと思わない(興味ない)も～ん」声を大にしています! その考え方は大きな間違いです!!!!

また、最近はずっと秋らしくなり、気温もさがってきました。そのため、体調を崩し、すでに風邪をひいた人もいるようです。しかし、体調が悪い時に不向きな服装をして“自分を大切に”できていない人がたくさんいます。

保健室では、ピアスによるトラブル等での来室もあります。

適切な処置をとっていなかった為に、炎症を起こして真っ赤になってしまったり、ピアスホールの中にピアスが埋まってしまったり、着けていたピアスが外れて耳の穴の奥に入り込んでいたり、いろいろなピアストラブルで保健室に来る人が数は少ないですがいます。ピアス以外にも、不適切なコンタクトレンズの使用によるトラブル、つけまつ毛やメイクによるトラブルで来室する人が、こちらもピアス同様少ないですがいます。

最近、少し古い本ですが「続ティーン・ガイド」というアメリカの家庭科教科書を読みました。その本の「衣生活」という章にこんな事が書かれています。『学校の中では、服装についての決まりがあれば、何を着るかについて良い判断ができます。決まりがない場合でも、次のような暗黙のルールがあります。学校で着る服はまずきちんとすることが大切です』

SOISでは服装について決まりがありません。ですが、5リスペクトの事を考えて、友だち同士、保護者の方、先生も一緒に、一度みんなで考えてみませんか?

【お知らせ】

図書館と保健室の初のコラボレーション企画!!

冒頭の講演会に置いてあった参考文献と、服装やおしゃれ障害(ピアストラブルなど、おしゃれに関わる健康障害)など、私と図書館の金澤さん(2人ともSISの卒業生です!)が生徒の皆さんに知ってほしい情報の載った本を数十冊ピックアップしました。特設コーナーを図書館内のらせん階段をおりた右側(カウンターの左の方)に設けてもらっています。図書館に行った時、ちょっと足を止めて、本を読んでみてください。図書館の新しい取り組み「START」の時間でもかまいません。一度、本に目を通してみてください。

読書感想文コンクール入賞

水口 香

SIS7年2組担任、英語科

SIS7年2組越牟田一輝君が、第38回大阪府私立中学校読書感想文コンクール自由読書部門の佳作に入賞しました。越牟田君は、夏休みの図書館開館期間に見つけた東野圭吾の「手紙」を通じて、家族のあり方を考え、個人的な取り組みとしてこの感想文を書きました。主人公を通じて、自分の中で眠っていたもう一人の自分に出会えた喜びが伝わってくる感想文でした。入賞おめでとうございます。

青山比呂乃

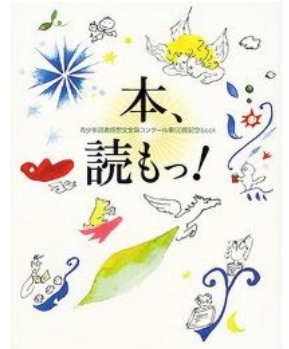
図書館

青少年読書感想文全国コンクールは、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が主催し、文部科学省が後援する全国規模のコンクールです。小中高の部があるので、皆さんの中には小学校の時に学校代表として応募したことのある人もいないかもしれません。

大阪府ではまず私立中学校だけの審査があり、学校によって

は学内の数百人の生徒の作品から3点までの選ばれたものが集められて、入賞(各部門優秀1点、優良2点、佳作3点、2部門)を競います。その後、2部門合わせての上位3点(優秀、優良)が大阪府中学校の部に集められて府代表が決まり、それが全国審査にでる、ということになります。

SISでは、学校として全員参加という形は取っていませんが、時々中学国語の夏休みの読書ノートの中の良い作品を先生が推薦したり、生徒本人が応募を希望して書いてきた時に審査して、学校代表作として応募しています。今回は、昨年度の9年の垣内穂佐奈さんに続き、学校としては2年連続、大阪府私学の佳作入賞となりました。おめでとうございます。



中国語検定合格

中島かり

中国語

6月最終の日曜日に行われた中国語検定で、12年2組の宮野京香が准4級と4級ともに合格しました。同じく12年2組の澤山凌介は4級に合格しました。全くのピキナーからの学習にも拘らず、たったの一年で4級を合格するには普段からかなりの勉強をしなければ合格することができません。よく頑張りました。本当におめでとうございます。

小論文作品入賞

山城亜希子

国語科

国語科で開講している小論文の授業の一環として、大阪経済大学主催の孝行歳フォーラム「17歳からのメッセージ」に応募したところ、全国32,285通もの応募作品の中から、複数名の銀賞受賞者が、我が校から出ました。崎山美琴さん(12-2)、良川葵さん(12-2)、廣井洸司くん(12-4)、の3名です。日頃の取り組みが、客観的な視点を受け、更には好評価を得たことは、非常に喜ばしいことであると思います。受賞されたみなさん、おめでとうございます。

韓国語検定合格

ペクソヨン

韓国語

6月に行われたハングル能力試験で12年生の廣澤沙紀さんが4級に合格しました。おめでとうございます！沙紀さんの一生懸命韓国語の勉強に取り組む姿勢に日々感動しています。大学に入っても続けて韓国語を頑張ってください。沙紀さんなら必ず上達すると思います。皆さんも是非韓国語に興味を持って私を訪ねてください。

SIS個別教育相談in東京

関西学院東京丸の内キャンパスにて随時個別教育相談を実施しています。ご希望の方は入学広報センターまでお申し込みください。なお、申し込みの際、お名前、お子様の学年をご記入いただきますようお願いいたします。E-mail admissions@senri.ed.jp TEL 072-727-5070

編集後記

秋学期から全高校生がタブレット端末を持つようになったので、その画面をホワイトボードに映し出して授業をすることが多くなりました。インターネットも見ることができるので、数学の話題提供の機会として私のブログ「小説や映画などに登場する数学」も時々紹介しています。ご覧いただいた方からコメント等いただければ嬉しいです。(馬場博史)

INTERCULTURE ◆Editor: Hiroshi Baba ◆Proofreader: Keiji Majima, Stephen Frater

◆Student Reporter Yurika Takebe (SIS11), Ikumi Kimura (SIS11)



＜SIS保護者会＞



☞ 関西学院大学バスツアー 2012

好評のうちに・・・SIS卒業生との座談会

去る6月6日、ボード主催による第2回関西学院大学上ヶ原キャンパス・バスツアーが開催されました。

バスツアーは、関学のグリークラブによる合唱鑑賞よりスタート。関西学院会館内のレストランでのランチ、4名のSIS卒業生との座談会、その後、シンボリックな時計台の見える中央芝生、充実した図書館などキャンパス内の散策を最後に、そのプログラムを終了。

それぞれに実り豊かな内容でしたが、「SIS卒業生との座談会」は、今回参加された皆さまから特に興味深かったと好評のプログラムでした。

田淵統轄からも『SIS卒の学生の努力が、関学の語学教育を変えつつある。自ら学ぼう、授業を意味のあるものにしよう、という努力をすることがSIS卒業生ならではの道だと思う。』とのコメントをいただきました。また、座談会参加の学生たちをコーディネートしてくれた大学院生は、『教授の方々などからSISの生徒をよく求められる。関学は実力のある、意欲に満ちた生徒を支える力をもっている大学。自ら学ぶ意思のある生徒を待っている。』と述べられ、SIS生への期待の高さが感じられました。



座談会では、「SISでの活動、関学への入学動機、入学後の感想」について、卒業生の皆さんに話していただきました。興味深いその報告は…、SISPAホームページに掲載中です!!!

当日実施したアンケートの結果と撮影した写真も併せて掲載していますので、ぜひアクセスしてみてくださいね。

⇒<http://www.sispa.jp>

☞ 今、私たちにできること

＝SISPA災害対策チームより＝

昨年9月、SOISの生徒・教員合わせて35人が、東北の被災地に強行軍でボランティア活動に出向いた。この夏休み中にも有志がまた被災地に赴いたと聞いている。きっと貴重な経験をいただろうと思う。昨年のボランティアに参加した生徒の一人がINTERCULTUREに寄せた感想(注)のなかで、“たくさんのボランティアの方が「忘れないで。そして、伝えて。」ということを繰り返し言っていた”、と書いていた。

大災害が起こったとき、発生から暫くは、繰り返し報道される生々しい映像や人々の悲痛な声に、何かできることはないかと思うし、わが身も万が一に備えようと意識する。しかし被災地から遠く離れていると、時間とともにその気持ちが薄れてしまうのは無理もない。でも被災地の復興への道のりはまだまだ遠いし、悲しみの気持ちが癒えることはない。だから「忘れないで。そして、伝えて。」なのだ。17年前に大震災を経験した神戸は、震災を経験した人の割合がかなり減っていて、当時の様子を伝えることもだんだん難しくなっているのが現状だ。それでも被災した人の思いを忘れてはいけないうし、犠牲になった多くの命を決して無駄にはしていない。

今、私たちにできることは何か。

SOISの生徒たちのようにボランティア活動をしたり、救援物資や義捐金を送って、遠くからでも被災地を応援したり、被災地を忘れないことはできるだろう。そしてもう一つ、万が一にできるだけ備えることも、災害の教訓を活かすために私たちが決して怠ってはいけないことだと思う。阪神淡路大震災が起こったとき、学校の建物に大きな被害はなかったものの、校内には物が飛散し、交通は遮断され、集まった先生方は生徒とその家族の安否確認に大変ご苦労をされたこと、ある先生から伺った。同じ規模の震災がもし学校のある時間帯に起こったら、子どもたちの安全と安心を確保できるのか、非常に心配だともおっしゃっていた。この原稿を書いている時点で、学校に緊急時の備蓄は何もない。そして今予測されている南海トラフ巨大地震の規模は、前回学校が経験したものより遥かに大きい。

昨年秋に、災害時に備えてSISPAとして何かできることはないかとの思いから、災害対策チームを立ち上げ、学校との話し合い、保護者に対して防災意識の喚起、サバイバルカードの製作・配布など、できることから少しずつ活動を行っている。インターナショナルフェアでは、個人用にサバイバルキットも販売する予定である。

今私たちにできることを、ぜひできるだけ多くの方と一緒に取り組んでいきたいと思っている。

*注 No.132号18ページに掲載。

SISPAホームページからも閲覧可能。

自力で生き残るために

災害対策チームの活動は、SISPA「災害対策」のページをご覧ください

⇒<http://www.sispa.jp>